

原イラン多神教と嘴形注口土器

足立 拓朗

Primitive Iranian Polytheisms and the Beak-shaped Spouted Vessels

Takuro ADACHI

本稿の目的はアケメネス朝ペルシアが形成される以前のイラン鉄器時代の様相を宗教を通して考察し、最古の世界帝国であるアケメネス朝の成立の一端を明らかにすることである。そのための考察は、原ゾロアスター教の成立、メディアの位置、嘴形注口土器の変遷・機能の順に行う。

一般にアケメネス朝ペルシアは、アフラ・マズダー神を崇拝するゾロアスター教を内包していたと考えられている。しかし、サーサーン朝期のゾロアスター教とは異なる性質の「原ゾロアスター教」と呼ぶべき宗教であったと考えられる。これまで、原ゾロアスター教の成立については様々な学説が唱えられてきた。本稿では、サーサーン朝期のゾロアスター教以前の「原ゾロアスター教」、そして、その母体となった「原イラン多神教」、また非ゾロアスター教的にアフラ・マズダーを崇拝する「マズダー教」という3宗教に分けて分析する。この3宗教に関する「ハオマ」祭祀を整理することにより、3宗教を考古学的に把握する方法を探る。次にメディアの位置について、J. リード (Read) によるハマダン以東説と L. D. レヴァイン (Levine) によるハマダン以西説があることを紹介し、考古学の成果からレヴァイン説に依ることを示す。最後に嘴形注口土器を5類型に分類し、前3千年紀から前1千年紀前半までの変遷を分析する。

本稿では原イラン多神教の「ハオマ」祭祀に嘴形注口土器が使用されていた、という仮説を提示する。メディア、アケメネス朝の中核地域には嘴形注口土器は存在しないため、メディア以降に「原イラン多神教」の崇拝は弱まっていったと考える。しかしながら、メディア期に併行する時期（鉄器時代Ⅱ、Ⅲ期）に、メディア以外の地域では嘴形注口土器が見られるため、原イラン多神教のハオマ祭儀が続いていたと判断した。メディアにおいて嘴形注口土器の祭祀が施行されなかった原因をアッシリアのザグロス侵入に求め、軍事的にも経済的にも強力なアッシリア勢力との接触に伴って、イラン鉄器時代の人々は様々な文化的・社会的・宗教的変容を余儀なくされたと考えた。

キーワード：ゾロアスター教、ハオマ、メディア、アケメネス朝、嘴形注口土器、イラン鉄器時代

The aim of this paper is to shed lights on the contributing factors of the foundation of the Achaemenid Empire of Persia, the earliest world empire, by means of the considerations of the ancient religions in the Iron Age of Iran.

The considerations in this paper are divided into three sections; the formation of primitive Zoroastrianism, the geographical location of Media and the chronology and function of the beak-shaped spouted vessels. It is generally known that the Achaemenid dynasty involved primitive Zoroastrianism centred around the cult of Ahuramazda. Various hypotheses have been studied regarding the formation of primitive Zoroastrianism. Three religions are analyzed in this paper, the primitive Zoroastrianism, the primitive Iranian polytheisms which were the parent religion of the primitive Zoroastrianism, Mazdanism that produced the cult of Ahuramazda in a distinguishing it from Zoroastrianism. In order to find a way to grasp these religions archaeologically, the cult of "Haoma" is also discussed. Secondly, the hypotheses by J. Reade and L. D. Levine are discussed and the theory by Levine is agreed upon regarding the archaeological materials dealt with in this paper. Thirdly, beak-shaped spouted vessels are typologically classified into five types in order to analyze their chronological sequences from the 3rd millennium BC to the first half of the 1st millennium BC.

In this paper it is hypothesized that beak-shaped spouted vessels were used in the cult of Haoma in the primitive Iranian polytheism. The beak-shaped spouted vessels are not found in the pottery groups in Media and the Achaemenid Dynasty. Therefore it can be considered that the primitive Iranian polytheism was not worshipped in Media and the Achaemenid Dynasty. The primitive Iranian polytheism, however, continued to exist as an indigenous religion in the Iron Age II and III

of Iran, which is contemporary with Media. The reason why the cult of the beak-shaped vessels did not exist in Media is due to the Assyrian invasions into the Zagros mountains. It can be hypothesized that the contacts of the strong Military and economical power of the Assyrian empire affected the Iron Age people of Iran leading to cultural, social and religious change.

Key-words: Zoroastrianism, Haoma, Media, the Achaemenid Dynasty, beak-shaped spouted vessel, the Iron Age of Iran

はじめに

オリエント世界を統一したアケメネス朝ペルシアの成立を考察することは、イラン史にとどまらずオリエント史の重要な課題の一つである。この最初の世界帝国は、それまでオリエント世界で中心地的な役割を果たしてきたメソポタミアやエジプトではなく、イラン高原から出現し、またアフラ・マズダー神を崇拝するゾロアスター教を信仰していたと考えられている。そしてゾロアスター教は善悪の倫理観に基づいた宗教であるという点で独創的であった。

本稿はゾロアスター教の成立を通してアケメネス朝成立以前の物質文化を分析する。これまで、ゾロアスター教の形成については様々な学説が唱えられてきた¹⁾。そして、ゾロアスター教そのものがサーサーン朝期に至る前までに大きく変容していることもわかっている。そのため、単にゾロアスター教と記述した場合、その教義に様々な矛盾が生じてしまう。そこで本稿では、発生期のゾロアスター教を「原ゾロアスター教」と記述し²⁾、「ゾロアスター教」という用語は原ゾロアスター教とそれ以降のゾロアスター教をも包括的する用語として使用することにする。

さて、一般に原ゾロアスター教の前にはヴェーダ型³⁾の多神教がイランに存在したと考えられている。本稿では、ゾロアスター教の母体となったと思われるこの多神教を「原イラン多神教」と仮称し、前1千年紀前半のイラン物質文化をこの宗教とどのように関連づけられるかを検討する。そのためにイラン鉄器時代で典型的な土器の一つである嘴形注口土器の型式分類を行い、分布・編年を分析する。メディアの勃興以降は嘴形注口土器が激減すること、また嘴形注口土器の発生が東北イランの前3千年紀までに遡ることから、嘴形注口土器が原ゾロアスター教ではなく、原イラン多神教に関係のある物質文化である可能性を提示する。また嘴形注口土器と「ハオマ」との関連についての考察を試み、原ゾロアスター教の原型となり、古代イラン文化の基層を形成していたと考えられる原イラン多神教の一端を明らかにすることを目的としている。

1. 原イラン多神教とハオマ

(1) 原ゾロアスター教の形成段階について

原ゾロアスター教とは、ザラスシュトラ⁴⁾ (ゾロアスタ

一) によって行われた一種の宗教改革であると見られている。ザラスシュトラは、それまでのイランに存在した多神教を一神教的な宗教に改革し、倫理観に裏付けされた二元論と終末論を加味して全く新しい宗教に変貌させた。

本稿後半では前2千年紀後半から前1千年紀の土器についての分析を行うが、この時期のイランで信仰されていたのは、原イラン多神教とマズダー教(後述)、原ゾロアスター教などであったと考えられる。そして、これらの宗教はザラスシュトラの改革などに伴って段階的に推移していったと推定されるが、研究者によって、その枠組みは大きく異なる。そこで、考古学的分析と対照させるため、各研究者の原ゾロアスター教形成説を整理することにする(表1、図1)。

ゾロアスター教の教典である『アヴェスター』は「ヤスナ」⁵⁾ (ザラスシュトラ自身が教義を記した「ガーサー」⁶⁾を含む)、「ヤシュト」⁷⁾、「ウィーデーウ・ダート」⁸⁾などに分かれている。これらは「首尾一貫したゾロアスター教の書物ではなく、古代イランの様々な種族なり宗教観の相克を反映したいわば寄せ木細工」(檜枝 1997: 260)であると評価されており、『アヴェスター』の解釈には、様々な学説が提示されている。

本稿で原イラン多神教と仮称した原ゾロアスター教以前の宗教については、いまだ不明な部分が多い。しかし、ザラスシュトラ自身が祭司であったことが教典『アヴェスター』に記されており、原ゾロアスター教以前に何らかの宗教組織が存在していたことは想定することができる。この宗教については、「インド・イラン人の宗教」や「アーリヤ人の宗教」、「ヴェーダ型の多神教」、「先ガーサーの宗教(pre-Gathic religion)」などと表現され、インドの古代宗教との類似が指摘されている(表1)。山本由美子はこの時期の崇拜対象として、太陽や火や水、雷や嵐、倫理的な徳目など(小川・山本 1997: 96)、また人間の力の及ばない自然現象や超自然的な力、最初に犠牲になった牡牛(山本 1998: 10-1)もあったと指摘している。本稿で使用する原イラン多神教という用語は、原ゾロアスター教以前の様々な多神教信仰を総称したものである。

また原ゾロアスター教の他に「マズダー教」という宗教の存在が提唱されている。一般にアケメネス朝の国教はゾ

表1 原ゾロアスター教成立をめぐる各段階説

段階説	文献	原イラン多神教		マズダー教	原ゾロアスター教
2段階説 1類	フォーヘル サング 2005(2002)	インド＝アーリヤ人の宗教(107)	×		前2千年紀後期(104)
	小川・山本 1997	太陽や火や水、雷や嵐、論理的な 徳目も神(96)	×		前1200～前1000年に成立(98)
	山本 1998	人間の力の及ばない自然現象や超 自然的な力を神格化、また最初に 犠牲になった牡牛を重要な神とし て崇敬(10-1)	×		前1200年頃(13)
	岡田 1982		×		原ゾロアスター教という宗教の中 核にはザラスシュトラの思想が存 するとしても、その周辺には各々 その源泉を異にする複雑な信仰や 慣習を含んだものと解する(8)
	岡田 1999(1984)	アーリヤ人の宗教(54)	×		前1000年頃？(54)
	ニョリ 1996(1985)	ヴェーダ型の多神教(155)	×	非ゾロアスター教的アフラマ・ズ ダーや原ゾロアスター教以前の アフラ・マズダーを認めない(145)	前1000年頃(107)
	Kellens 2000	先ガーサーの宗教(pre-Gathic religion)(29)	×		前1000年頃(35)
2段階説 2類	ハーツ 2004(2003)	原始的な多神教(51)	×		前8世紀頃(57)
	伊藤 1972	ザラスシュトラによって斥けられ たインド・イラン的パンテオンの 神々(419)	×		ザラスシュトラの教義の原初形態 をザラスシュトラ教(原ゾロアス ター教)、ザラスシュトラの排斥 した教義まで混成したゾロアス ター教
	伊藤 1974	インド・イラン世界の神々	×		前7～前6世紀(145-6)、ザラ スシュトラがアフラ・マズダーを創 称(143)
	伊藤 1979	インド・イラン世界の神々	×		ザラスシュトラは前630年頃シ スターンに生まれ、前553年頃没(xi)
2段階説?	春田 1998		×		前1000年の前後数百年間(69)
	Gnoli 2000		?		ザラスシュトラの生年を前618-前 541年とする(165)
	青木 2002		?		前1200年頃(26)
3段階説 1類	ボイス 1983	インド・イラン語族が礼拝した神 々(10)	○	原ゾロアスター教以前にもアフ ラ信仰は存在(43)	前1500～前1000年(4)
3段階説 2類	エリアーデ 2000(1976)	伝統的なアーリア人宗教、カラパ ンやウシグという祭司のいる定着 牧畜民(195)	○	アフラ・マズダーはザラスシュ トラ以前からイラン人のあいだで崇 拝されていた(214)	前1000～前600年(194)、アケメ ネス朝でもマズダー教を用いる (218-9)
	ギルシュマ ン 1966		○	ゾロアスターによる宗教改革以前 の東イランのマズダー教(447)	前7世紀頃(436)
	ギルシュマ ン 1970		○		アケメネス朝の間にザラスシュ トラによって改革された拝火教が帝 国内に広がり始めた(152)
3段階説?	香川 2004		○	多神教的なマズダー教(154)	前600年前後(154)
	足利 1972	革新的ザラスシュトラ教に対立し たる古きインド・イラン的宗教 (17)	○	ザラスシュトラ以前のマズダー教 (40)	
	ブリアン 1996(1992)		○	マズダー教という名称は使わな いが、最高神アフラ・マズダーを信 仰することを説明	アケメネス朝期では使わない
	バンヴェニ スト 1996(1929)	インド・イラン語族の最古の神々 (48)	○	原ゾロアスター教とは別のマズ ダー教がアケメネス朝で信仰され ていた(44)	既存の宗教から攻撃され、長い間 基盤を持つにいたらず、変化を余 儀なくされた(98)
	ヴィンカン デル 1997	イランの原始宗教、アフラー・マ ズダー崇拝、ミスラ崇拝、男性結 社など混在(95-105)	○		
	前田 2003	伝統的なアーリヤ宗教(161)	△	アケメネス朝の宗教が原ゾロア スター教であるかないかは、依然 として解かれないままの問題(174)	

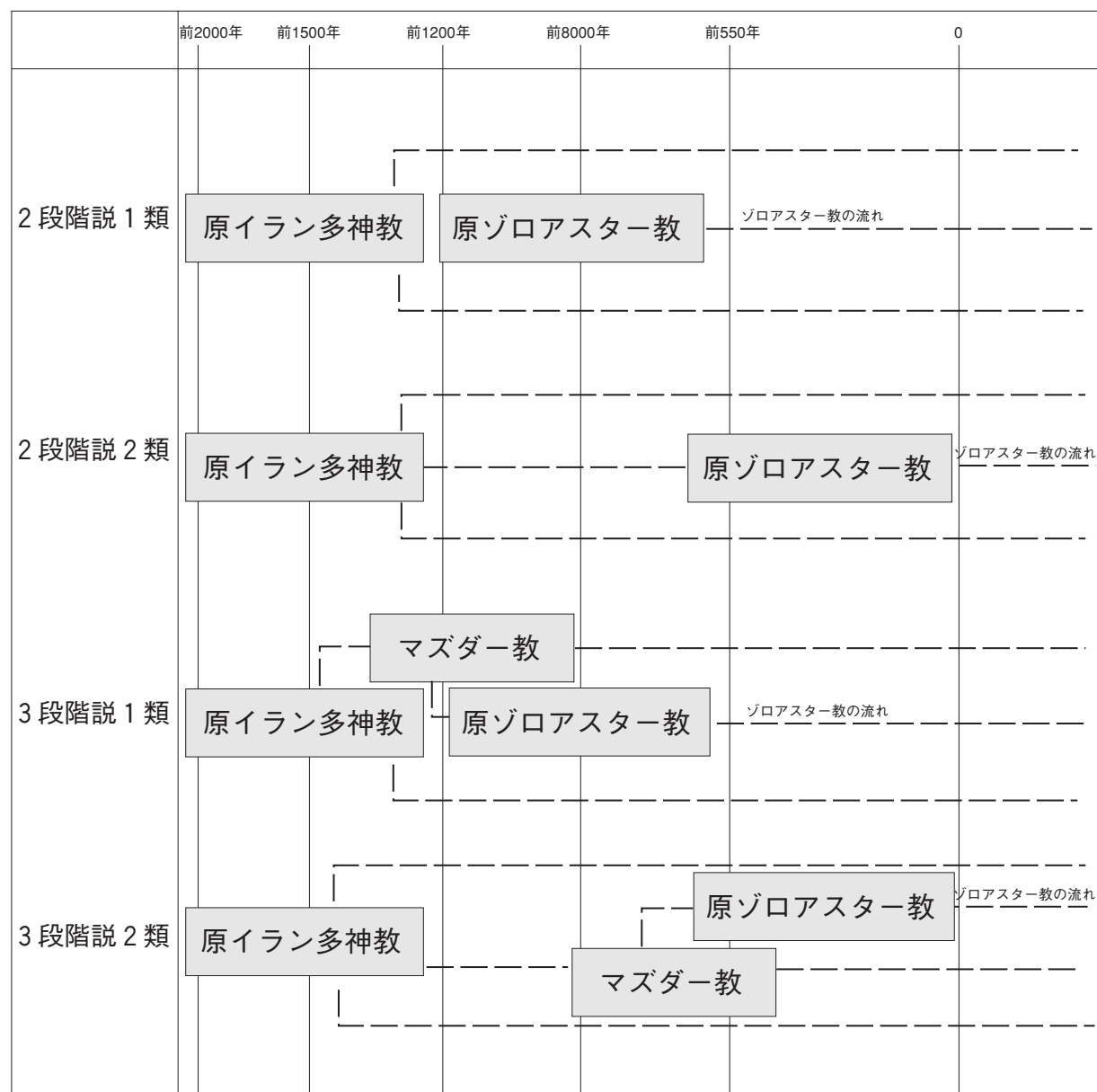


図1 原ゾロアスター教の各段階説模式図

ロアスター教であったと考えられているが、多くの研究者に指摘されている通り、アケメネス朝期の文字資料には「ザラスシュトラ」の名前は記されておらず、「原ゾロアスター教」が存在したとする明確な根拠は乏しい。しかし、アフラ・マズダーを崇拝していることは明確に記録されているため、これを単に「マズダー教」と記述し、原ゾロアスター教とは分けておく考えがある。また原ゾロアスター教以前にアフラ・マズダー崇拝の存在を認め、非ゾロアスター教的なマズダー教が存在したとする立場もある。

このマズダー教に対する研究者の立場は大きく分かれており、他分野の研究者が古代イランの宗教を把握する際には注意が必要である。表1では、マズダー教を認める立場には「○」、そうでない場合には「×」を記して区別した。

アケメネス朝にいたるまでにイランの宗教は、「原イラン多神教」→「原ゾロアスター教」の2段階、あるいは「原イラン多神教」→「マズダー教」→「原ゾロアスター教」という3段階があったと考えられる。

原ゾロアスター教の形成の過程について諸説あるのと同時に、原ゾロアスター教がいつ、どこで誕生したか、についても研究者の意見の一致をみしていない。誕生地の問題については、アゼルバイジャン説、シスターン説、中央アジア説などがあるが、『アヴェスター』には西イランに関する記述が全く残されておらず（ニヨリ 1996: 135）、イラン東部周辺に起源を求めるのが穏当であろう。

ゾロアスター教がいつ起こったのかについては、言語の比較によって前1000年以前とする説と、教徒の伝承など

に基づいて前 1000 年～前 6 世紀に置く説がある（表 1 参照）。この 2 説はいまだ対立している⁹⁾。また、春田晴郎はゾロアスター教の成立時期を前 1000 年前後の数百年とみなしている（春田 1998）。このような両説を包括する年代観が現段階では最も穏当な意見といえよう。以上の見解は、マズダー教の存在を認めるかどうか、原ゾロアスター教の起源を前 1000 年以前とするか以降とするか、を基準として 4 つの説に区別することができる（表 1、図 1）。

この 4 説いずれにも可能性があるわけだが、本稿で問題にしようとしている時期、イラン鉄器時代（前 2 千年紀後半～前 1 千年紀前半）には、原イラン多神教、マズダー教、原ゾロアスター教の 3 者が存在した可能性があることを念頭に置いておくことが肝要となる。

（2）ハオマと古代イラン多神教の祭儀

マズダー教と原ゾロアスター教を分離させて考えるのは、H. S. ニーベリ（Nyberg）に始まるようであり¹⁰⁾、彼はゾロアスター教の成立以前にアフラ・マズダー崇拜、ミ斯拉崇拜、ザラスシュトラと敵対する儀礼様式を持つ集団の存在を指摘した（ヴィカンデル 1997: 9）。S. ヴィカンデル（Wikander）はニーベリの学説を発展させ、ザラスシュトラと敵対する集団を「アーリヤの男性結社」と考え、男性結社儀礼の存在を提示した（ヴィカンデル 1997: 77）。そして、『アヴェスター』の中に原ゾロアスター教以前の宗教的対立が読み取れると指摘した（ヴィカンデル 1997: 98）。

すでに述べたように、原ゾロアスター教の成立過程には不明な部分が多い。ただ、原ゾロアスター教の最初期の状況は、経典『アヴェスター』の一部である「ガーサー」に記されている。「ガーサー」はザラスシュトラ自身が記したとされる経典で、ゾロアスター教教義の中核となっている。「ガーサー」にはザラスシュトラと敵対する教団のことが記されており、ザラスシュトラの改革に反対した宗教集団の存在を窺わせる。

ザラスシュトラが布教の対象とした人々は、カラバン（眩き手）とかウシグ（供儀執行者）¹¹⁾ という祭司のいる定着農耕民によって構成されていた、と M. エリアーデ（Eliade）は指摘している（2000: 195）。伊藤義教訳の「ガーサー」（伊藤 1972）には、ザラスシュトラに敵対する教団として、「カラバン僧は、天則よりも財物を選取し」（ヤスナ 32.12）、「カラバン僧もカウイ王侯らも減んでしまったが」（ヤスナ 32.15）、「牛をカラバン僧とウシグ僧とが、アエーシェマにささげるに」（ヤスナ 44.20）、「世を破壊するために、人間を悪行に、権勢をもって結びつけるのは、カラバン僧とカウイ王侯らですが」（ヤスナ 46.11）、「不屈きにもカラバン僧らがそれをもって吐き気を催させ」（ヤ

スナ 48.10）、「盟友とか律法の者としてカラバン僧らは牧地に副うことはせず」（ヤスナ 51.14）、として「カラバン僧」が 6 回、「ウシグ僧」が 1 回登場している。

この他に「牛と太陽を、目をもって見るに最悪なりと称するもの」（ヤスナ 32.10）では、ミ斯拉教徒が「ガーサー」に記されていると指摘されている（伊藤 1972: 335 註 12）。このような宗教集団群（カラバン僧、ウシグ僧、ミ斯拉教徒）が「ガーサー」に表現されている原イラン多神教教徒であろう。これらの集団の存在を考古学的に分析することは可能だろうか。もし可能ならば、いまだ暗中模索な状態が続いている原ゾロアスター教の形成段階について新たな光を当てることができるかもしれない。

しかしながら、「ガーサー」に記された事象の時期や地域については不明な点が多く、特定の集団である「カラバン僧」・「ウシグ僧」を考古学的に立証することは非常に難しいと考えられる。また古代イラン史研究における史料の著しい不足（Frye 1984; 佐藤 1994; 春田 1998）と近年の考古学調査の停滞が困難さに拍車をかけている。考古学調査は近年次第に増加しつつあり¹²⁾、それに伴い新たな文献史料が発見される可能性もゼロではないが、当分の間はこのような状態が続くことが予想される。

「カラバン僧」や「ウシグ僧」が実在していたかどうかを検証することは困難であり、今のところ、原イラン多神教のイメージにすぎない。これらの実態に迫る研究は前記のヴィカンデルによるもので、彼は「カラバン僧」などの祭儀を「アーリヤの男性結社」の祭儀と同定した（1997）。ザラスシュトラの宗教改革自体が、「カラバン僧」やその信者に対して行われた可能性も高い。

前田耕作は、「ザラスシュトラの新教の中心的思想は「ガーサー」にその輪郭をみることができる。第一はダエーワ（デーヴ＝邪悪なる偽りの神々）への祭祀、牛とハオマの供儀を禁じたことである」という重要な指摘をしている（前田 2003: 161）。ザラスシュトラが、「カラバン僧」らが行うオーギー（陶酔的、暴力的、狂乱的な）祭儀を嫌悪することは、エリアーデや M. ボイス（Boyce）なども指摘している（エリアーデ 2000; ボイス 1983）¹³⁾。「ガーサー」の記述から、このオーギー祭儀には程度の差はあれ「残酷な牛の犠牲」と「ハオマの多量摂取による陶酔状態」が含まれていると考えられる（エリアーデ 2000: 196, 198, 205; ボイス 1983; 岡田 1984: 32; ニョリ 1996: 155）。

しかし、ハオマ祭儀については『アヴェスター』の中では、ヤスナ 42 章 5 で「黄なる、たけ高いハオマを、われらは崇める。強壮にし、庶類を榮えさせるハオマを、われらは崇める。ドゥーラオシャなるハオマを、われらは崇める」と記されているように肯定されている。また「ヤシュト」に記されている神々（ヤザタ）への供儀にハオマは欠

表2 ハオマの解釈について

	原イラン多神教の祭儀	原ゾロアスター教の祭儀
岡田明憲	酒	
フォーヘルサング	幻覚誘発性（麻薬？）としてのハオマ	
伊藤義教	麻薬？としてのハオマ	
ボイス	覚醒作用（麻薬？）のハオマ	
ヴィンカンドル	男性結社でのハオマ祭儀	
前田耕作	ハオマ祭儀	ハオマ祭儀の禁止
エリアーデ	酩酊飲料としてのハオマ	植物の液、水、乳の混合物

かせないものとして無数に表現され（岡田 1984）、「ホーム・ヤシュト」という一節まで作られている（伊藤 1972: 384-393）。『アヴェスター』の中でも新しく加えられた部分は『新体アヴェスター』と呼ばれ、この中の「ハオマ祭儀」はまさにゾロアスター教の祭儀といえる。このようにハオマの取り扱いについて、原ゾロアスター教と『新体アヴェスター』のゾロアスター教の間の矛盾については様々に議論されてきた（Boyce 1970; パンヴェニスト 1996: 25; ニョリ 1996: 155; 青木 2005: 44 註 12）。

W.フォーヘルサング（Vogelsang）によれば、ハオマとは、インド・イラン人に利用された一種の植物、もしくはキノコ¹⁴⁾から作られる飲み物で、幻覚誘発性を持ち、インドでは初期の段階で別の植物に取って代わられた（2005: 106）とされる。

M. ボイスによると、ハオマはミルクと混ぜて水への供物に使われ、二種類の植物の葉と茎をすりつぶして得た液体がハオマと言われ、「押しつぶされたもの」という意味である。ボイスは、原インド・イラン語族により本来用いられた植物が何であったかは確かではないが、エフェドラ（*Ephedra*）（覚醒作用を持つ植物）の一種、今日、ゾロアスター教徒が用いる「ホーム（hom）」（山地に野生するシダの一種）であったと指摘している。また、それを飲むと戦士は闘志に満ち、詩人は靈感を受け、祭司は神の啓示に感応しやすくなり、石の乳鉢でその植物をすりつぶし、水への供物を用意することはヤスナ祭式の重要な部分であると述べている（ボイス 1983: 8-9）。

上記の説は、ハオマが幻覚作用をもたらす麻薬のような植物液である、としている。しかし、ハオマはある種の酒の原料であったとする考えもある。岡田明憲によると、ゾロアスター教では特にハオマから作られた酒を一般の酒と区別し、一般の酒が酩酊し凶暴な行為を想起させ、大魔アエーシェマ¹⁵⁾に関係するのに対して、ハオマの酒は義なるアシャ¹⁶⁾に関係するという（岡田 1984: 22）。つまり、岡田はハオマ酒とは別に酒があり、これがアエーシェマの祭儀に使用されたとしている。しかし、岡田がハオマ酒につ

いて述べているのは原ゾロアスター教ではなく、ゾロアスター教であると考えられる。

伊藤義教訳（1972）の「ガーサー」中には、ハオマの記述は存在しない。ザラスシュトラが嫌悪しているのは、「かの酒という汚水を、いつ、御身は打倒し給うのですか。」（ヤスナ 48.10）という記述に見られる「酒」であるという。当然、岡田の指摘するハオマ酒とは違うものであろう。伊藤はハオマについて研究を追加し、まず上記のヤスナ 48: 10 の訳を補訂し、「いつ御身はこの催酔者の尿を打倒したまうのですか」としている（伊藤 2001: 470）。伊藤は「催酔者の尿」を「ハオマ酒」と考え、この句は「ハオマ酒」を罵倒している場面と見る（伊藤 2001: 470）。また、「ガーサー」のヤスナ 32: 14 の訳を補訂し、「ドゥラオーシャ」を「（いわゆる）遠くを見せるもの（とやら）」と訳し（伊藤 2001: 464）、これを「ハオマ」と同一視している（伊藤 2001: 466）¹⁷⁾。「ドゥラオーシャ」や上記の「催酔者の尿」を「ハオマ」と考えることができれば、「ガーサー」にも「ハオマ」が記されていることになり、ザラスシュトラは「ハオマ」を否定していることになる。

伊藤は「ハオマ」を一種の麻黄（*Ephedrae herba*）と考え、その中でも学名 *Ephesda gerardiana* をアヴェスターのハオマに比定している（伊藤 2001: 466）。この麻黄からはエフェドリンが抽出でき、中枢神経や交感神経を興奮させる働きがあるという（伊藤 2001: 466; 山崎 1985: 80-91）。伊藤は「ハオマ」に対して「遠くを見せるもの」や「尿」という言葉を使うことは、ザラスシュトラが「ハオマ」を拒否していることを表している、と考えている（伊藤 2001: 472-3）。つまり、伊藤はザラスシュトラの嫌悪する祭儀に「ハオマ」が使用されていたとしている。

エリアーデは原ゾロアスター教以降になると流血供儀は全面的に禁止され、酩酊飲料としてのハオマは消え去り、植物から作られた液体、水、乳の混合物が代用とされた、と解釈している（2000: 223）。この酩酊飲料がハオマ酒なのか、ただの「酒」なのか、あるいは麻薬に近い「ハオマ」なのかが問題である。

アエーシェマの祭儀を原イラン多神教に含めて考えるな

らば、ハマオの議論をまとめると表2のようになる。岡田以外は原イラン多神教でハオマが麻薬あるいは酩酊飲料のような陶酔的な作用をもたらす物質と推定されている。そして、ハオマはザラスシュトラによって否定されたとも指摘されている。前田の重要な指摘を繰り返すと、「ザラスシュトラの新教の中心的思想は... (中略)... ハオマの供儀を禁じたことである」であり(前田 2003: 161)、原イラン多神教で行われていたハオマ祭儀が原ゾロアスター教では執り行われなかった可能性が高い。

そこで、確実に原ゾロアスター教が施行されている地域の祭祀的遺物と原ゾロアスター教が存在しないとされる時期から使用され続けている祭祀的遺物を比較することにより、原イラン多神教と原ゾロアスター教を考古学的に検討する可能性が生まれる。

しかし、原ゾロアスター教以降のゾロアスター教、サーサーン朝期のそれでは、岡田によって述べられているようにハオマはアシャと関係する。すなわち、ハオマ祭儀はゾロアスター教の祭儀の一つとして完全に認知されている。このハオマ祭儀の変容とは、つまり、原イラン多神教で執り行われ、原ゾロアスター教で廃止、それ以降のゾロアスター教で復活する、ということである。原ゾロアスター教では禁止されたハオマ祭儀がいつ頃から再開されたかが問題であり、ハオマ祭儀が一時的に中止されただけならば、考古学的に探ることは困難であろう。そのため、原イラン多神教のハオマ祭儀で使用された祭祀遺物をイラン鉄器時代の物質文化から特定し、その祭祀遺物がどのような変遷を辿って古代イランの歴史の中に位置づけられるのかを検討しなくてはならない。

その祭祀遺物を特定するための前提となるのが、原イラン多神教に男性結社による祭儀が存在することを指摘したヴィカンデルの説である。伊藤も「ガーサー」中の「マルヤ」という用語について、「本来は青年の意味だが、若い戦士で宗教的な儀礼をもって結社していた集団の団員」(伊藤 1972: 387 註3)と註をつけており、男性結社の存在を指摘している。そして、佐藤進は、ダレイオス1世の古代ペルシア語碑文に、「マーリカ(若者)」と呼ばれている人々が存在する、と指摘し、古代イランには戦士的男子結社に近い組織が存在したと推定している(佐藤 1994: 91)。

このように祭儀を執り行ったのは男性結社であるという前提に立てば、男性であることを示す特殊な遺物の存在が、原イラン多神教のハオマ祭儀の祭祀遺物となりうる可能性が高い。

(3) 嘴形注口土器を持つ男性土偶

イラン鉄器時代には嘴形注口土器という不自然に長い特殊な注ぎ口を持つ土器が存在し、その特徴的な土器を持つ

た男性土偶が存在する(図2-1~6)。これらの男性土偶には、ペニスが明確に表現されているのが特徴で「男性」であることを誇示する造形となっている。そして、これらの土偶は、腰に剣を差した「戦士」の姿で表されることがある。

発掘調査によってこの男性土偶が出土するのは稀で、図2-1のババ=ジャン(Baba Jan)遺跡出土資料が貴重な類例(Goff 1978: Fig. 13-1)であった。しかし、土偶が持っている容器が破損しており、真に嘴形注口土器を持っているのか判然としなかった。この資料以外にセフィードルード川流域のキャルーラズ遺跡¹⁸⁾でこのタイプの男性土偶が出土していることは知られていたが、実測図は提示されていなかった。しかしながら2005年夏にイラン文化遺産観光庁から資料調査が特別に許可され、キャルーラズ遺跡の出土遺物を実測することができた¹⁹⁾(図2-2, 3)(Ohtsu and Adachi 2006: Fig. 4-45, 4-47)。図2-2は嘴形注口土器ではなく、単なる片口状の注口土器を持っているように図化しているが、この容器部分は推定により修復したものであり、修復部を波線で図示したものである。

このような男性土偶の多くは美術品として流通している。管見ではあるが、国内に収蔵されている資料としては大阪市立東洋陶磁美術館に1点(図2-4)(大阪市立東洋陶磁美術館 2002)²⁰⁾、平山郁夫シルクロード美術館に2点存在する(図2-5, 6)(シルクロード研究所・山内 2002)。

キャルーラズ出土の男性土偶はいわゆるケルノス形の嘴形注口土器を抱えている。それぞれの容器は内部で連結しており、非常に複雑な構造になっている。ペニスや剣が明確に表現されており、嘴形注口土器を使用しているのが、男性戦士像であることは明らかである。ケルノス形の容器は西アジアの広い範囲で祭祀に使用されたと考えられており(四角 2003)、この資料も祭祀用であると考えられる。

そして中近東文化センター附属博物館が所蔵する嘴形注口土器資料(図8-2, 7)には、特異な器形の嘴形注口土器があり、これらも祭祀用であることが想定できる。図8-2はキャルーラズ資料と同様なケルノス形を呈しており、五つの小壺が肩部に巡る特異な形態をしている。図8-7は容器部分が2連壺になっており、キャルーラズ資料(図2-3)と平山郁夫シルクロード美術館資料(図2-6)に形態が類似しており、このような特別な器形が複数製作されたことを示している。

ケルノス形の嘴形注口土器が存在し、それらが祭祀用である可能性を指摘したが、嘴形注口土器自体が非常に長い注ぎ口を有する特殊な土器であり、また非常に丁寧に製作されており、これら自身が祭祀に使用された可能性を指摘したい。まず図2に示した男性土偶は嘴形注口土器との密接な関係を表している。このような土偶は何らかの行動を

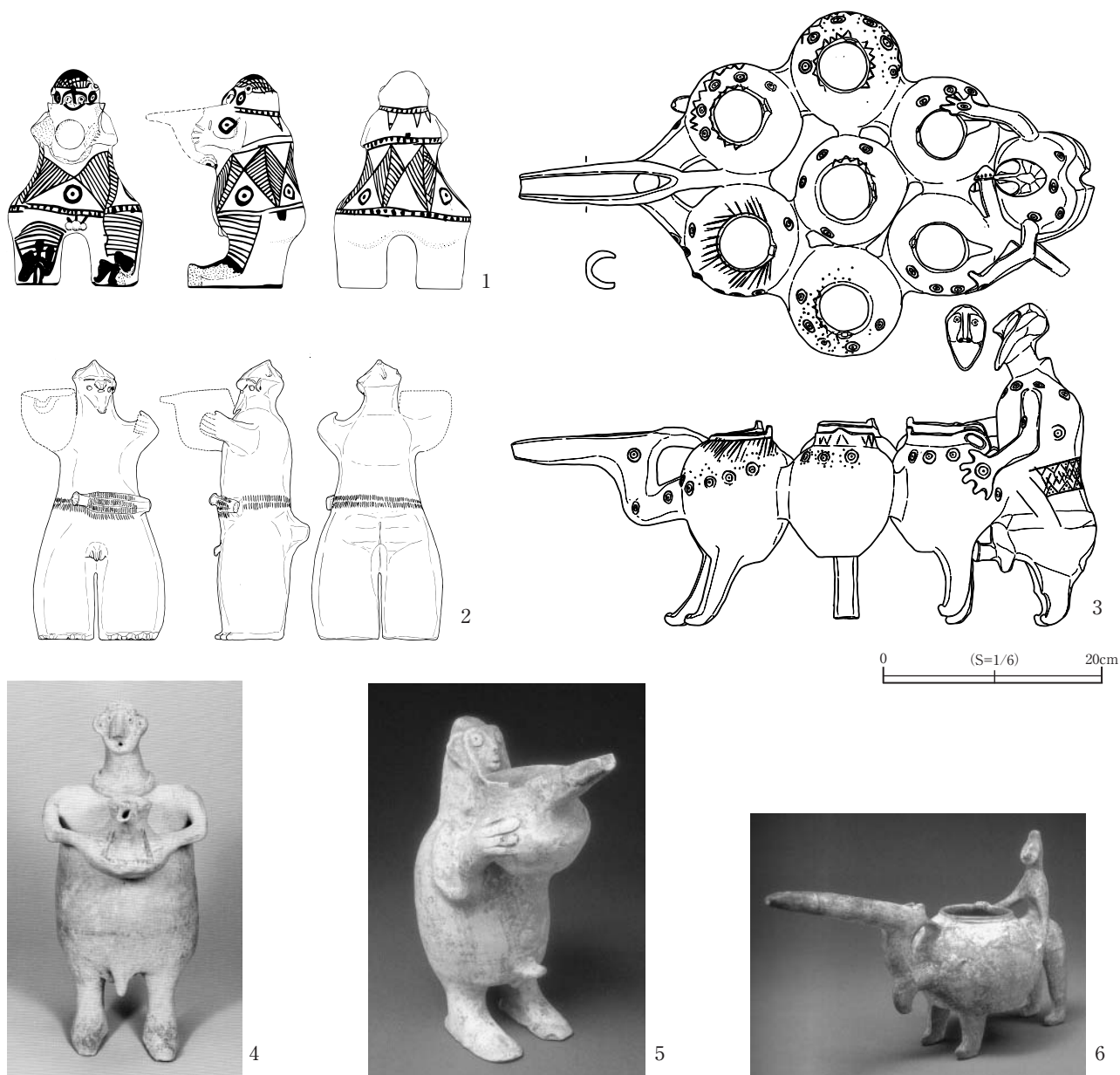


図2 嘴形注口土器を持つ男性土偶

1. ババ・ジャン遺跡出土資料：Goff 1978: Fig. 13-1 2, 3. キャララズ遺跡出土資料: Ohtsu et al. 2006: Fig. 4-45, 5-47 4. 大阪市立東洋陶磁美術館所蔵資料：大阪市立東洋陶磁美術館 2002: 図版 13 5, 6. 平山郁夫シルクロード美術館所蔵資料：シルクロード研究所・山内 2002: 図版 16, 19

象徴するために製作されたと考えられる。また嘴形注口土器を使用するのが男性に限られる可能性も示唆している。

北東イランに出現した灰色土器が古代イラン人の物質文化とみなされる意見がよく知られている (Young 1985)。この仮説はまだまだ検証が必要である (Overlaet 2003: 8)。しかし、灰色土器群の製作者が古代イラン人と完全に一致するかはともかく、古代イラン人の存在した時期・地域に特徴的な土器群であることは確かである。嘴形注口土器はこの灰色土器群の一器形として誕生した。

装飾や形態は在地の土器文化を吸収しながら変容してい

ったが、特徴である嘴形注口は前3千年紀から前1千年紀前半まで継続して用いられた。このような複雑な器形が長期間にわたって使用し続けられたことから、嘴形注口土器が「祭祀」用であったと想定することは可能であろう。祭祀という特殊な用途ではなく、単なる流行でこのような複雑な器形が長期間存続したとは思えない。

嘴形注口土器は何らかの液体を注ぐための容器であるが、長い注ぎ口を持つことから、液体が注がれるのに時間がかかる。そして、その長い注ぎ口は樋状になっており、液体が注ぎ口を流れるのが見えるようになっている。その

ため単なる液体ではなく、何らかの大切な意味のある液体を注ぐための容器であったと考えられる。

嘴形注口土器はイラン鉄器時代を通して存在することから、その存続期間は原イラン多神教と一致する。また原イラン多神教で祭儀を執り行ったと推定されている男性結社の存在を指摘したが、嘴形注口土器を持った男性土偶がイラン鉄器時代に存在することは、男性結社の祭儀の存在を示唆しているのではないだろうか。

そして、嘴形注口土器を使用して行われた祭儀とは何らかの大切な液体に関係するものであるとすれば、それはハオマ祭儀に相当すると考えられる。このハオマ祭儀が原ゾロアスター教の開始とともに一時廃止されることをすでに述べた。嘴形注口土器は鉄器時代Ⅲ期まではイラン北部に存在するが、鉄器時代Ⅲ期に併行するメディアの物質文化からは殆ど見られなくなり、アケメネス朝期の遺跡からは出土例がなくなる。

嘴形注口土器が原イラン多神教のハオマ祭儀に関連する祭祀土器であれば、その使用がメディアで消失することは、この時期に原ゾロアスター教が信仰されていたことを表す指標となりえる。メディア期に嘴形注口土器が殆ど存在しないことの重要性を指摘したが、メディアの考古学的解釈には注意を要する点が幾つかあり、まずそれらについての本稿の立場を明確にした後、嘴形注口土器の分析に進むことにする。

Ⅱ. イラン鉄器時代編年とメディア

イラン鉄器時代研究の資料の収集・整理はまだ不十分である。1979年からイランでの調査・研究に大きな進展がみられない状況が続いたことがその原因のひとつであった。しかし、1990年代末頃から新たな調査が実施されるようになり、イラン人考古学者の調査成果に触れることも可能になってきた。

1979年以前の日本人によるイランの考古学的調査は東京大学を中心にして進められ、比較的早くその成果が報告されたが（江上 1965; 江上・深井・増田 1966; 曾野・深井 1968; 深井・池田 1971; 深井・松谷 1982）、他の海外調査隊の報告は断片的なものが多かった。しかし、1990年頃からようやく成果を報告するケースが見られるようになり、近年研究資料が増加している²¹⁾。

イラン鉄器時代の歴史的研究は、アケメネス朝以前の古代イラン史を叙述することである。しかし、メディアあるいはペルシア以外のイランについては明らかになっていることは非常に少なく、またイランの鉄器時代の物質文化が全てイラン人によるもの、というわけでもない。だが、イラン鉄器時代の中からメディアやアケメネス朝が出現したことは確かであるし、イラン鉄器時代を母体として原ゾロ

アスター教が出現したことも確実である。

しかし、イラン鉄器時代に、「原イラン多神教」、「マズダー教」、「原ゾロアスター教」がどのように出現したのかは不明である。アケメネス朝期には、マズダー教か原ゾロアスター教は確実に存在している。その前段階のメディアではどのような宗教が信仰されていたのだろうか。

メディア人とペルシア人はイラン人の一派であり、北方よりイラン高原へ進出したと考えられてきた。メディア人とペルシア人がどのような経路で移動してきたか、という問題はこれまで様々に議論されてきたが、まだ結論をみてはいない（佐藤 1994, 1995）。

またメディアの地理的な位置についても、アッシリアがイランのどこまで進出したかをめぐる論争と関係していて、いまだ決着が着いていない。ペルシア人については、ウルミア湖周辺から次第に南下し、現在のファルス州に至ったとする説とイラン北東部から移動してきたとする説などがある。最近は後者が有力なようである。メディアについては、その語源がバビロニア語であるとも考えられている（佐藤 1994: 22）。一般にメディアの首都であったエクバタナは現在のハマダンであると信じられているが、度重なる発掘調査にもかかわらず、この地がエクバタナであったという確証は得られていない（Liverani 2003: 2）。

メディアがイラン鉄器時代の中に位置づけられることは確かなのであるが、イラン鉄器時代の時期区分が複雑であることをまず認識しておく必要がある。イランの鉄器時代は三時期に分けられるのが一般的であるが、研究者によってその年代に違いがあり²²⁾、またイラン自体が広大であるため、一律に時期区分を当てはめることはできない（図 3、4）。

これが、イラン鉄器時代の理解を妨げる要因の一つになっており、またメディアについて考える際にはさらに複雑になる。メディアの存続時期をアッシリアの記録に記載された前 9 世紀頃からキュロス 2 世に破れた前 550 年までとすると、概ね鉄器時代Ⅱ期の後半～Ⅲ期の時期に相当することになる。メディアの物質文化を考える時、通常は鉄器時代Ⅲ期のみが対象とされ、ヌシ＝ジャン（Nush-i Jan）、ババ＝ジャン、ゴディン（Godin）遺跡を中心に考古学的研究が進められてきた。

メディアを考古学的に認識できる時期が鉄器時代Ⅲ期（前 8～前 6 世紀頃）あるとすると、鉄器時代Ⅱ期後半（前 9 世紀頃）はメディアの形成期と言える。しかし、この形成期のメディアについては殆ど考古学的にはわかっていないというのが実状である。また前 9 世紀という開始年代はアッシリアの記録から推定されているもので、それ以前からメディアが存在していた可能性は高い。

次にメディアの地理的位置についてアッシリアの文献研

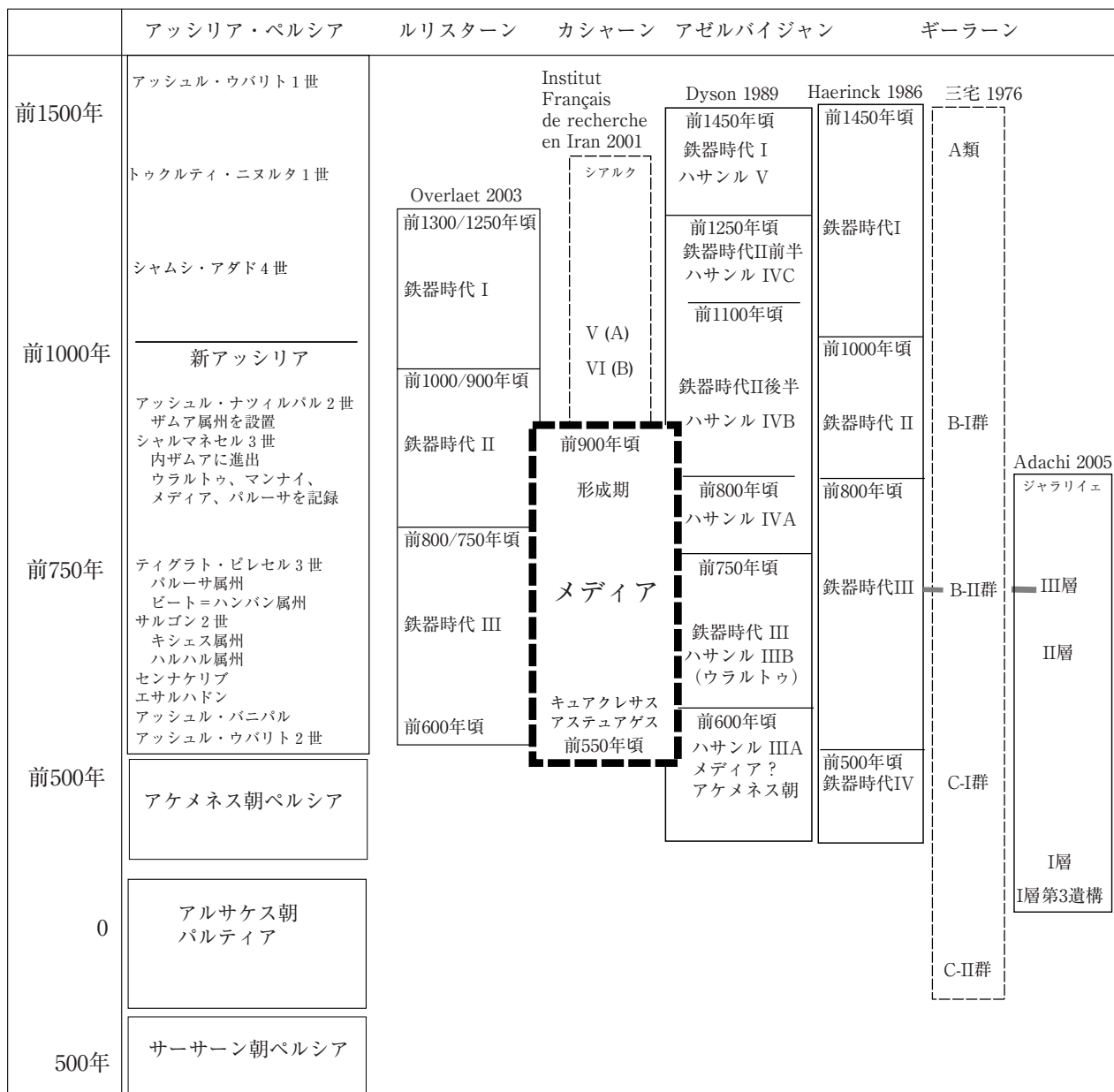


図3 イラン鉄器時代編年とメディア

究を概観する。メディア中核地域の位置についてはまだ特定されておらず、2つの説が存在し、どちらをとるかによって、ヌシ＝ジャン、ババ＝ジャン、ゴディン遺跡にメディア期を認定できるかの鍵となる。

アッシリアがザグロス山脈に度々軍事遠征したことは、様々な文書に残されている。この軍事遠征はイランからの様々な物資の輸送ルートとその支配下に置くこと、戦利品を略奪することなどが目的であったと考えられる。ザグロス山脈でアッシリアが入手しようとした産物は馬やラピス・ラズリであったと見られている (Young 1988; Liverani 2003: 5-6)。アッシリアはザグロス山脈内をいわゆる大ホラサーン道(バビロンからザグロス山脈を横断し、

現在のケルマンシャー、ハマダン、テヘランを抜け、東北イラン(ホラサーン)に至るルート)を通して侵入し、パルサー、ビート＝ハンバン、キシュス(カル＝ニヌルタ)、ハルハル(カル＝シャルキン)の四つの属州を設置した(図5、6)。そして、その東側にメディアが存在していたと考えられている。

リード(Read)はアッシリアの属州がハマダン周辺まで及んでいたとする説を提示し、山田重郎もこの考えに沿って各属州の位置を示している(図5)(Read 1978, 1995; 山田 2002)。これに対して、レヴァイン(Levine)とC. T. ヤング(Young)、M. ローフ(Roaf)はケルマンシャー周辺までをアッシリアの属州と考えている(図6)

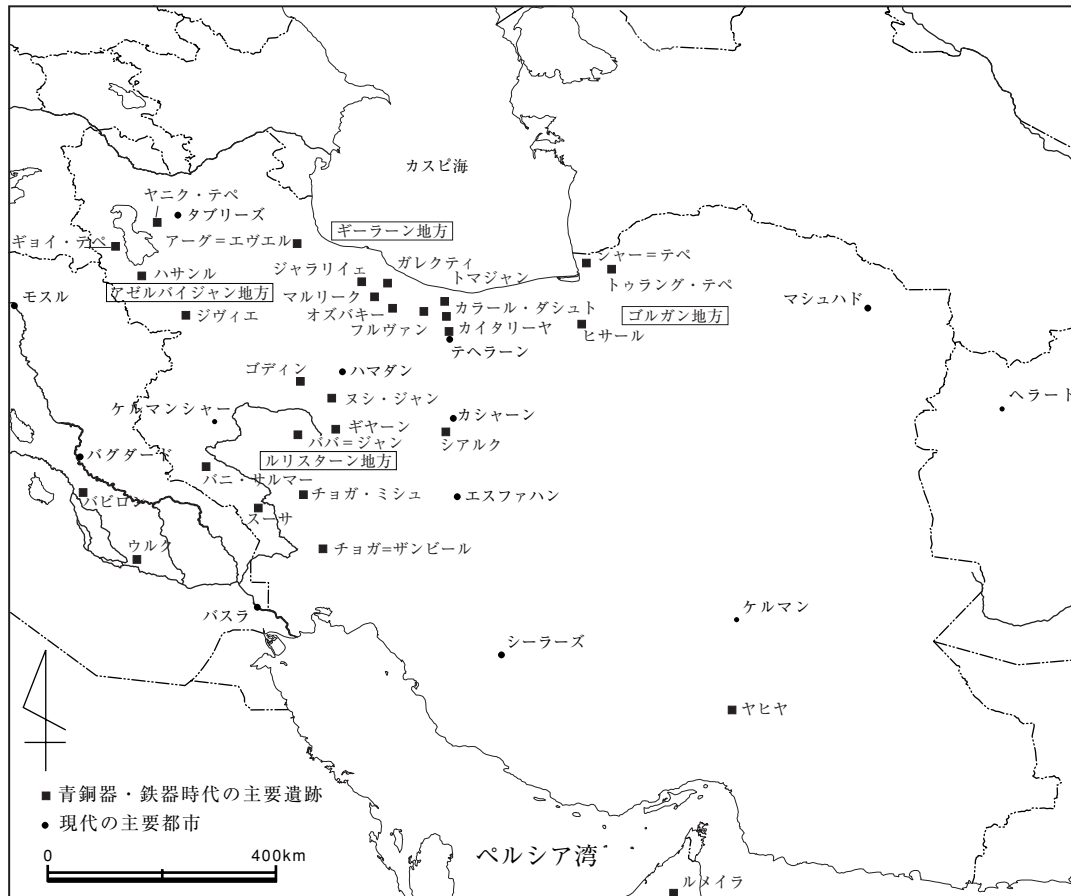


図4 イラン鉄器時代遺跡分布図

(Young 1988; Levine 1977, 2004; Roaf 1995)。この議論は1970年代から現在まで続いており、いまだに意見の一致をみていない。ここでは、前者をリード説、後者をレヴァイン説と呼んで検討することにする²³⁾。

リード説に従うとヌシ＝ジャン、ババ＝ジャン、ゴディン遺跡はアッシリア属州に含まれることになってしまう。そのため、これらの遺跡のメディア層がアッシリア支配の前なのか、後なのか問題となってくる。メディアがアッシリア属州を奪取した時期は、少なくともエラムを滅ぼすほどアッシリアの勢力が充実していたアッシュル・パニバル（在位：前668-627年）の治世より後であると想定できる。したがって、アッシリアから領土を奪取した時期は前627～550年頃であったと考えられる。

ヌシ＝ジャン遺跡ではメディア期の大規模な神殿と考えられる遺構が少なくとも3期にわたって築かれており(Stronach and Roaf 1978)、約80年程度の短期間の居住ではなかったと考えられる。したがってヌシ＝ジャン遺跡はアッシリアから領土を奪取した後のメディアの遺跡とは考えにくい。この遺跡を調査したローフがリード説に従っていないのも当然であろう。ゴディン遺跡にも大規模遺構が発見されているが、この遺跡を調査したのがヤングとレ

ヴァイン自身であり、彼らもまたこの地まではアッシリアの属州支配は及んでいなかったとしているのである。

ヌシ＝ジャン遺跡の大型遺構群の時期については、前8世紀後半から前7世紀とする説(Liverani 2003: 5-6)と前6世紀まで下るとする説(Stronach 2003: 266)がある。大型遺構群の時期が7世紀で終わると考えると、メディアが最も拡大したと考えられる時期（前6世紀前半）にはヌシ＝ジャン遺跡には小規模な集落しか存在していなかったことになるため、考古学的はこの時期を「メディアの暗黒時代」と捉える研究者も存在する(Liverani 2003: 7; Roaf 2003)。

鉄器時代Ⅲ期（前8～6世紀頃）にアッシリアがハマダン周辺まで属州支配をしていたのであれば（リード説）、この地に長期のメディア居住層は存在しないことになってしまう。また、メディアの中核はさらに東側のイラン高原中央部に求められることになる。しかし、その地域に鉄器時代Ⅲ期の遺跡は発見されておらず、リード説を支持する証拠ではなかった。

しかし、最近、イラン中央部のカシャー地域（シアルク(Sialk)）遺跡南丘の発掘がなされ、新たな資料が公表されている(Fahimi 2003)。また、ゴディン遺跡のメディ

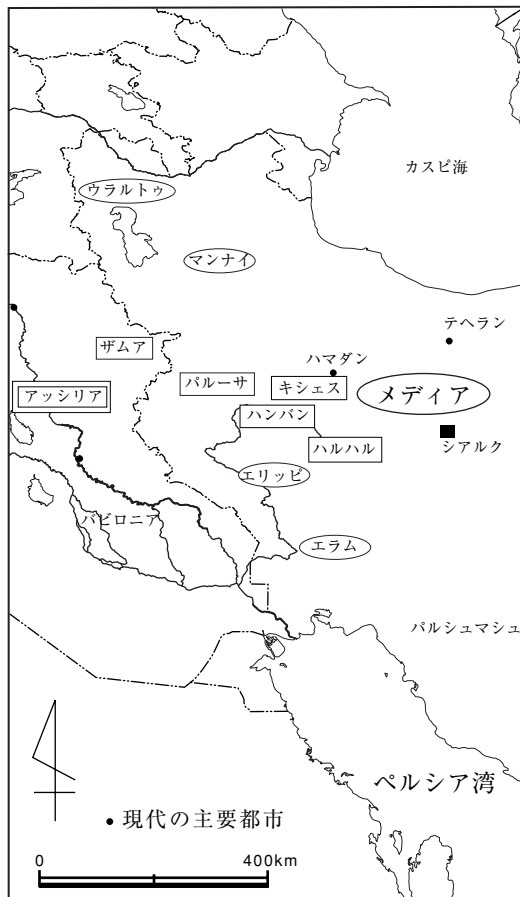


図5 リード説によるアッシリア属州の位置

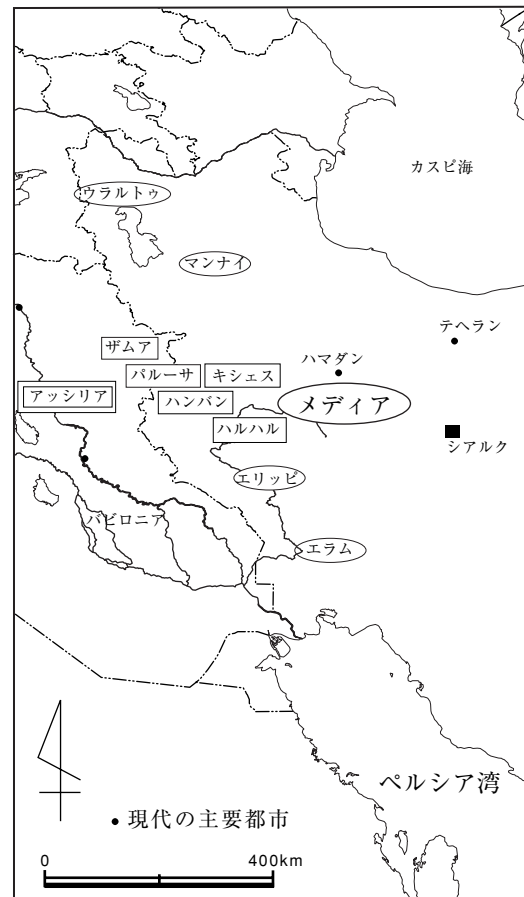


図6 レヴァイン説によるアッシリア属州の位置

ア期土器群の研究が博士論文として発表された (Gopnik 2000)。

シアルク遺跡は新石器時代の北丘と新石器～鉄器時代の南丘、鉄器時代の墓地地区の三つの遺跡に分かれている。南丘は中央部に基壇状の構造物を持つ大型遺丘である。この遺跡は R. ギルシュマン (Girshman) によって 1930 年代に調査された (1938, 1939)。近年の再調査で、鉄器時代層からアッシリアの影響を受けたと考えられる鉢形土器が出土しており、注目される。

シアルク遺跡の鉄器時代は墓地遺跡で発見され、V、VI 期 (あるいは A 期、B 期) と名付けられた。それぞれ北西イランの鉄器時代 I、II 期に相当すると考えられてきた (堀 1985, 2000)。今回、南丘で新たに発見された鉄器時代土器群には、ヌシ=ジャン、ババ=ジャン、ゴディン遺跡から出土しているメディアの典型的な器形である水平把手付の小型鉢 (Simpson 1997: 157; 足立 2006) が含まれており (Fahimi 2003: Pl. 13-13)、鉄器時代 III 期と考えられる。そして、アッシリアの口縁外屈鉢と類似する土器も出土している (Fahimi 2003: Fig. 19-1, 2, Fig. 12-2, Pl. 10-8; 足立 2006)。

口縁外屈鉢はフォート=シャルマネセル (Fort

Sharmanaser) やニネヴェ (Nineveh) など、アッシリアの中核地で出土しているばかりでなく、シリアのアフィス (Afis) やパレスティナのドル (Dor) といったアッシリア征服地の拠点からも出土している (足立 2002)。

近年、メディア期と考えられるゴディン遺跡の II 層出土土器の詳細な報告が出され、この遺跡からもアッシリアの影響と考えられる口縁外屈鉢が出土している (Gopnik 2000; 足立 2006)。この報告では、チョガ=ミシュ (Choga Mish) 遺跡のアケメネス朝層をメディア期として捉えるなど、新たなメディア編年観が提示されている。

シアルク遺跡に鉄器時代 III 期が存在し、アッシリアの影響を受けた土器がシアルク遺跡に存在するという事実は、アッシリアの影響がハマダン以東にまで及んでいたことを意味しており、リード説を補強する物証のようにも見える。しかし、その数量は少なく、影響はあったとしてもごくわずかであったと考えなければならない。他の大多数の土器にはアッシリアの影響を示すものは認められないからである。

イラン鉄器時代の研究は最近大きく進展している (Fahimi 2000; Kombachsh Fard 2001) が、その中でも III 期に関する情報が多く蓄積されつつある。まずハサンル

(Hasanlu) 遺跡のⅢB 期はウラルトゥの居住層であることがほぼ確定し (Dyson 1989)、北西イランの鉄器時代Ⅲ期はウラルトゥの影響下にあったということになる。また、ルリスタン西部についてはベルギー隊の調査報告が出版され (Overlaet 2003)、鉄器時代Ⅲ期におけるルリスタン東部 (ババ=ジャン遺跡など) との相違が明確になった (Adachi 2004)。ギーラーン地域では 2000 年から中近東文化センターがセフィードルード川流域のジャラリエ (Jalaliye) 遺跡で調査を行い、この地域の鉄器時代Ⅲ期の存在を層位的に明らかにした (Adachi 2005)。また有松唯は東京大学が調査したデーラマン資料を再検討し、当該地の鉄器時代編年を整理している (有松 2005, 2006)。

鉄器時代Ⅲ期の土器の特徴は、彩文が殆どみられなくなるほか、丁寧な磨研土器も少なくなるなど全体的に装飾性が低下することである。嘴形注口土器は鉄器時代Ⅱ期までは画一的な形態で北イラン全域に分布していたのだが、Ⅲ期になるとギーラーン州とルリスタン州で特殊な形態に変化する (足立 2004)。

このような変化は前 9 世紀に始まるアッシリアのザグロス遠征が何らかの影響を及ぼしていたと見ることもできる。少ないながらもイラン高原中央部のシアルク遺跡までアッシリアの影響を受けた土器が運ばれていることは、アッシリアとの間に何らかの交流があったことを示している。また、アッシリアは広域の戦線を維持するために大量の馬を入手する必要がある、その供給地であったイランは重要な地域であったと考えられる (Young 1988)。商業的な交流が存在していたと考える研究もあり (Sancisi-Weerdenburg 1988; 春田 1998: 70)、メディアの興隆はアッシリアとの交易によるもので、アッシリアの衰退がメディアの衰退の原因になったと考える研究もある (Liverani 2003: 11)。アッシリアがイランに与えた影響は軍事的な脅威だけではなく、経済的な影響も存在したと考えられる。

この考えは、シアルクやゴディン遺跡に認められるわずかな外来の土器だけを基にしているわけではない。ギーラーン州セフィードルード川流域で行われた遺跡踏査では、鉄器時代Ⅱ～Ⅲ期から集落が急増することが判明しており (Yamauchi 2005; Ohtsu et al. 2006)、この時期に何らかの経済的発展がみられたことを物語っている。シアルク遺跡ではギーラーン州の鉄器時代Ⅲ期に類似する土器も存在し (Fahimi 2003: Pl. 12-7, 8, 9)、イラン高原とギーラーン州の間にも交流が存在したことを示している。

ハマダン周辺がアッシリアの属州となっていたかどうかはまだ明確になっていないとはいえ、この地がアッシリアとメディアの攻防の地であったことは確かであろう。シリア・パレスティナ地方の諸国が連合してアッシリアと対抗したような動きがイラン高原でも興ったと推測することは

できる。そのような連合体の中心が実際にアッシリアと隣接することになったハマダン周辺勢力 (メディア) であった可能性は十分考えられる。シアルク遺跡やギーラーン州のジャラリエ遺跡はハマダン周辺勢力 (メディア) の後背地的な役割を果たしていたものとみることができる。今後はハマダン以東の鉄器時代Ⅲ期の様相を整理し、これらがメディアとどのような関係を持っていたのかを検討することが肝要である。また、アッシリア属州の拠点遺跡をザグロス山脈中で発見することも必要であろう。

ともかく現状では、考古学者がメディアと推定している物質文化はヌシ=ジャン、ババ=ジャン、ゴディン遺跡に見られ、考古学的な状況証拠からはメディアの中心地はハマダン以西に存在したと言えそうである。ゴディン遺跡やイラン中央部のシアルク遺跡からアッシリア系の土器が少数ではあるが確認されており、またシアルク遺跡からはメディア系の土器が確認されている。ギーラーン州の鉄器時代Ⅲ期に類似する土器も出土している。このようにアッシリアのザグロス侵入に呼応するかのようにイラン鉄器時代土器文化相互に交流が見られるようになる。

Ⅲ. 嘴形注口土器の分類と編年

イランの鉄器時代は伝統的にⅠ、Ⅱ、Ⅲ期に細分されるが、その年代観は研究者によって様々である (図 3)。オリエント世界の鉄器時代の開始時期は前 1200 年頃とするのが一般的だが、北西イラン地域では、前 1500 年頃から前 1200 年頃を鉄器時代Ⅰ期にあてており (Haerinck 1988; Dyson 1989)、イランの他地域の年代とも異なっている。イランの鉄器時代にはいくつかの年代の指標となる物質文化が存在するが、嘴形注口土器もその一つと言える。この嘴形注口土器は北イラン一帯に分布しており、イランの青銅器時代から鉄器時代の変遷を考えるために重要な物質文化の一つである。ここでは、嘴形注口土器について、中近東文化センターが調査したジャラリエ遺跡の成果と中近東文化センター所蔵資料を駆使し、その器形分類と編年試案を提示し²⁴⁾、イラン鉄器時代の編年を整理する作業の一助としたい。

本稿で嘴形注口土器として集成した資料には、片口状の注口のみを有する資料は含めていない。明確な嘴形注口部を有する資料を嘴形注口土器とした。嘴形注口部は、先端が長く尖り、断面が槌状を呈する注口嘴部、そして注口嘴部を支える管状の注口頸部からなる (図 7-2, 4)。

(1) 分類と編年

注口嘴部と注口頸部の形態の組合せと、胴部の器形、把手部の形態からⅠ～Ⅴの 5 類型に分類した (図 7)。

Ⅰ類 (図 7-1, 2)

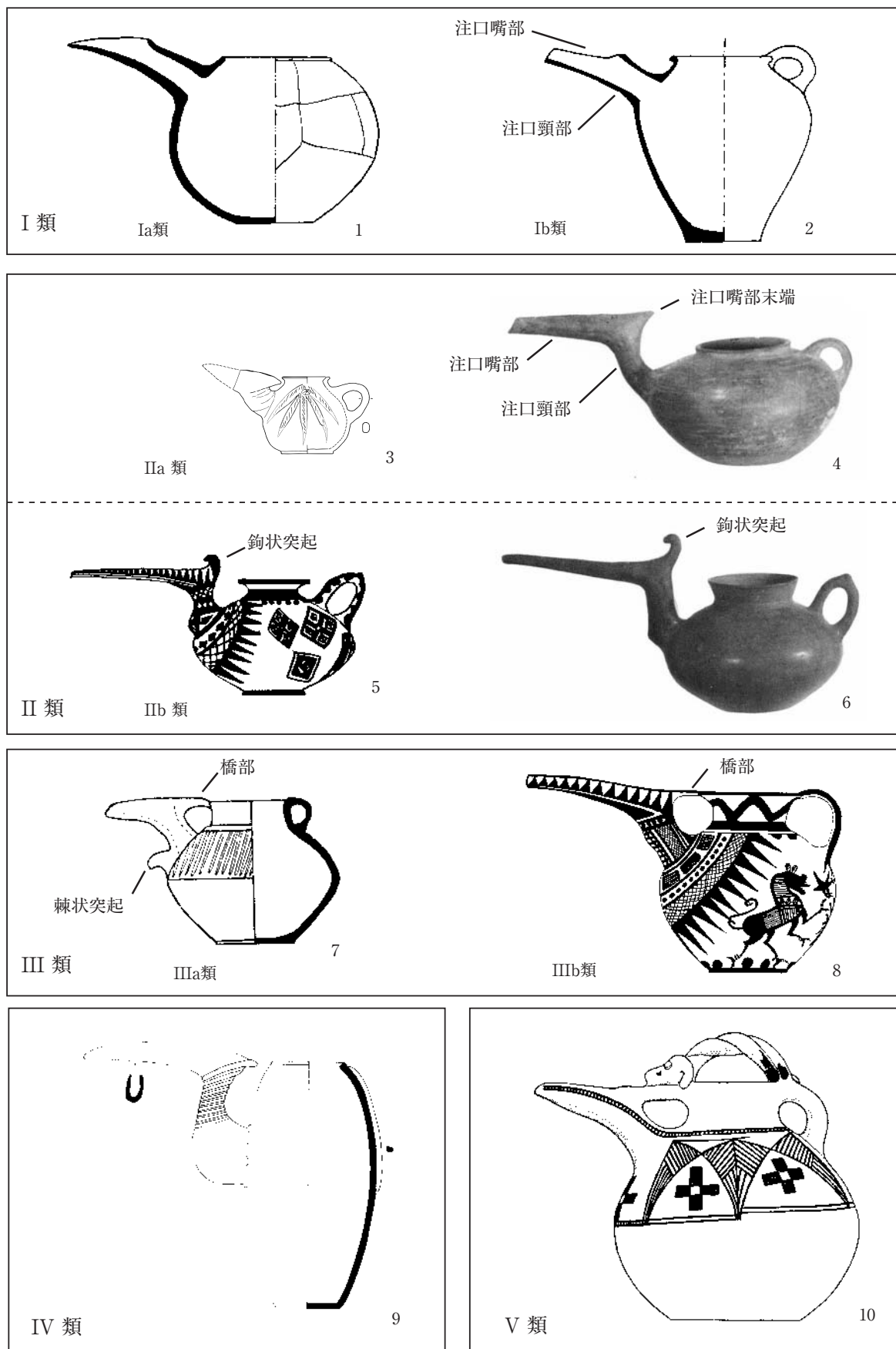


図7 嘴形注口土器形態分類案 (出典は文末)

シャー＝テペ (Shah Tepe) II B 層・ヒサル (Hisar) III C 層資料を基準とする。胴部が球形を呈する無頸壺の胴部上半から嘴形注口部が立ち上がる。注口嘴部と注口頸部は直線的に連続する。把手がなく胴部がほぼ球状を呈する Ia 類 (図 7-1) と、把手があり胴部上半が膨らむ Ib 類 (図 7-2) の少なくとも 2 つの類型が存在する。前者がシャー＝テペ II B 層・ヒサル III C 層資料であり、後者はシアルク A 期 (前 2 千年紀後半) で認められ、後者のほうが時期的には下る。II 類以降の嘴形注口土器には概ね把手が付いており、把手の伝統は Ib 類から生まれているようだ。

II 類 (図 7-3 ～ 6)

注口嘴部と注口頸部の連結部が屈曲するか、あるいは注口嘴部末端に突起が存在することにより注口嘴部と注口頸部の差が明確になる類型。I 類と異なり短頸壺が器形の主流となり、ほぼ全てに把手が付けられる。注口嘴部末端が鋭角的な形状を呈する IIa 類 (図 7-3, 4) と末端に鉤状突起あるいは動物頭部の突起装飾が付けられる IIb 類 (図 6-5, 6) の 2 つの類型が確認できる。この両者の前後関係を論ずるための層位的なデータは存在しないが、Ib 類と IIa 類は胴部上半部が膨らむ器形 (Ib 類: 図 7-2、IIa 類: 図 7-4) に類似が見られ、IIa 類には I 類の特徴である注口嘴部と注口頸部が直線的に連なる形態に資料 (図 7-3) も存在することから、IIa 類が IIb 類に先行すると考えられる。ギョイ B 期、フルヴィン、ギヤーン I 期、シアルク B 期で出土している。

そして、最近イラン文化遺産観光庁の考古学研究センターによって、カズヴィーン州オズバキ (Ozbaki) 遺跡が発掘され、メディア期と認識される城塞跡から IIb 類が出土していることが注目される (Stronach 2003: 240; Majidzadeh n.d.: Pl. 7-7)。この発見により、IIb 類が前 6 世紀前半まで下る可能性が浮上してきた。

III 類 (図 7-7, 8)

注口嘴部末端と口縁部をつなぐ橋部を持つ類型である。器形は頸部の明確な壺形を呈し、無頸壺や短頸壺は見られなくなる。胴部は算盤玉状を呈する。注口嘴部上面と口縁部上面が同一平面上に配置されるように橋部が設置されるものが多く、このような形態を理想として製作された類型であろう。ハサンル IV 期とシアルク VI 期に類例が多いが、前者が磨研と沈線文・条線で装飾され、後者が彩文で装飾されるという大きな相違点がある。この両者は注口頸部の形態にも相違点が見られる。前者には棘状の突起 (図 7-7) が認められ、後者には僅かな屈曲 (図 7-8) が認められる。前者を IIIa 類、後者を IIIb 類と細分しておく。前後関係については分析する層位的なデータはない。注口嘴部と口縁部を同一面状に配置させるという特徴的な器形を有するこ

とから、ほぼ同時期と考えておきたい。

大阪市立東洋陶磁美術館の資料は、IIIb 類の嘴形注口土器を持つ彩文男性土偶である (図 2-4)。この類型はイラン鉄器時代 II 期の指標として用いられている (Young 1965; Dyson 1965, 1968, 1989)。そして、嘴形注口土器の他の類型よりもはるかに広範囲に分布していることが最近の研究で判明しつつある。南西イランのヤヒヤ (Yahya) で出土しているし (Lamberg-Karlovsky and Magee 2004: Fig. 5.45.d)、ペルシア湾を越えてオマーン半島のルメイラ遺跡 (Rumeilah: Potts 1990: Fig. 41-c; Magee 1997: Fig. 2) やリスク遺跡 (Lisq: Kroll 1991: Fig. 1) でも出土している。

IV 類 (図 7-9)

注口頸部が大きく屈曲し、器形は筒状の鉢形である。このような器形は他の類型に存在せず、また把手が付かないことも特徴である。注口頸部には水平の沈線文が数条巡らされる。彩文が施されるものはなく、赤、灰、黒、褐色の単色で、ほぼ全面が磨研されるものもある。胴部に沈線文が施される場合もある。マルリーク、フルヴィン、カイトリエ、ジャラリエ遺跡などエルボルズ (Elbruz) 山脈中の遺跡から出土している。

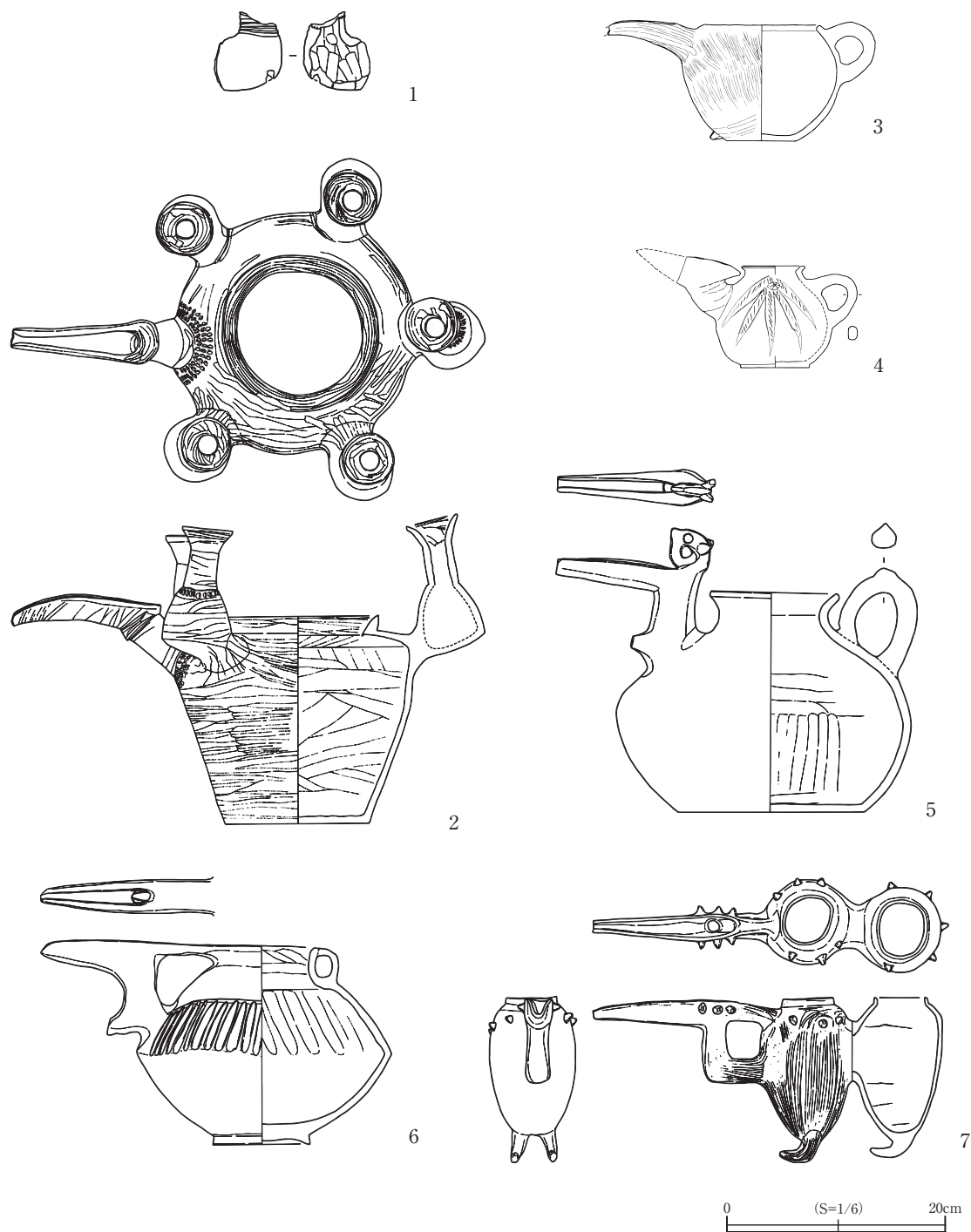
V 類 (図 7-10)

注口嘴部と注口頸部がほぼ直線的に連続し、橋部が付設される。口縁部上部には把手が付けられ、胴部上半部の把手もあることから、この類型は 2 つの把手が存在することになる。しばしば口縁部上部の把手にはねじりが加えられている。ババ＝ジャン III 期から出土しており、ババ＝ジャン III 式土器特有の彩文が施される (Adachi 2004)。

(2) 資料の分析

5 類型の年代を層位的に分析する (図 9)。古い方から順に類型の変遷を追うと、まず Ia 類が前 3 千年紀半ば頃に成立する。Ib 類は把手が付けられる類型であり、Ia 類より後出である。その後、注口嘴部と注口頸部の屈曲した II 類が登場する。II 類は、注口嘴部の形状により、IIa 類・IIb 類に分かれており、ハサンル V 層と同時期と考えられるギョイ B 期で IIa 類 (図 9-5) が出土しており、メディア層と見られるオズバキの城塞層で IIb 類が出土していることから、かなり長期間使用された類型である。

III 類については、ハサンル IV 層で IIIa 類が出土するという事実から、IIa 類の次に現れると考えられる。しかし、前 2 千年紀前半まで遡るヒサル III C 層で、III 類らしき資料 (図 8-15) が出土していることが問題となる。この資料の器形は、把手を持たない胴部球形の無頸壺で、注口部が直線的であることから、I 類に近い様相を備えている。この資料は本分類の枠組みでは例外な資料と考えておきたい。



No	器形	残存率	色調		装飾と調整		胎土	類型
			内面	外面	内面	外面		
1	嘴形注口容器	5%	5YR5/3 にぶい赤褐色	7.5YR4/4 褐色	ナデ、指頭痕	ミガキ	砂粒含有	IV
2	子持装飾嘴形注口壺	100%	明赤褐色	明赤褐色	ケズリ、ナデ	ミガキ	砂粒少量含有	Ib
3	嘴形注口壺	90%	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	ナデ	ミガキ	きめ細かい	Ib
4	把手付嘴形注口壺	90%	5YR3/4 暗赤褐色	5YR3/4 暗赤褐色	ナデ	ナデ、刻線	砂粒含有	IIa
5	把手付嘴形注口壺	100%	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	砂粒少量含有	IIb
6	把手付嘴形注口壺	100%	明灰色	明灰色	沈線、ミガキ	ナデ	砂粒少量含有	IIIa
7	脚付嘴形注口二連壺	100%	暗灰褐色	黒色・暗灰褐色	ケズリ、ナデ	ナデ?	砂粒少量含有	IV

図8 タッペ・ジャラリエ遺跡出土資料 (1: Ohtsu et al. 2002: Fig. 148:76)、中近東文化センター附属博物館所蔵資料 (2-7)

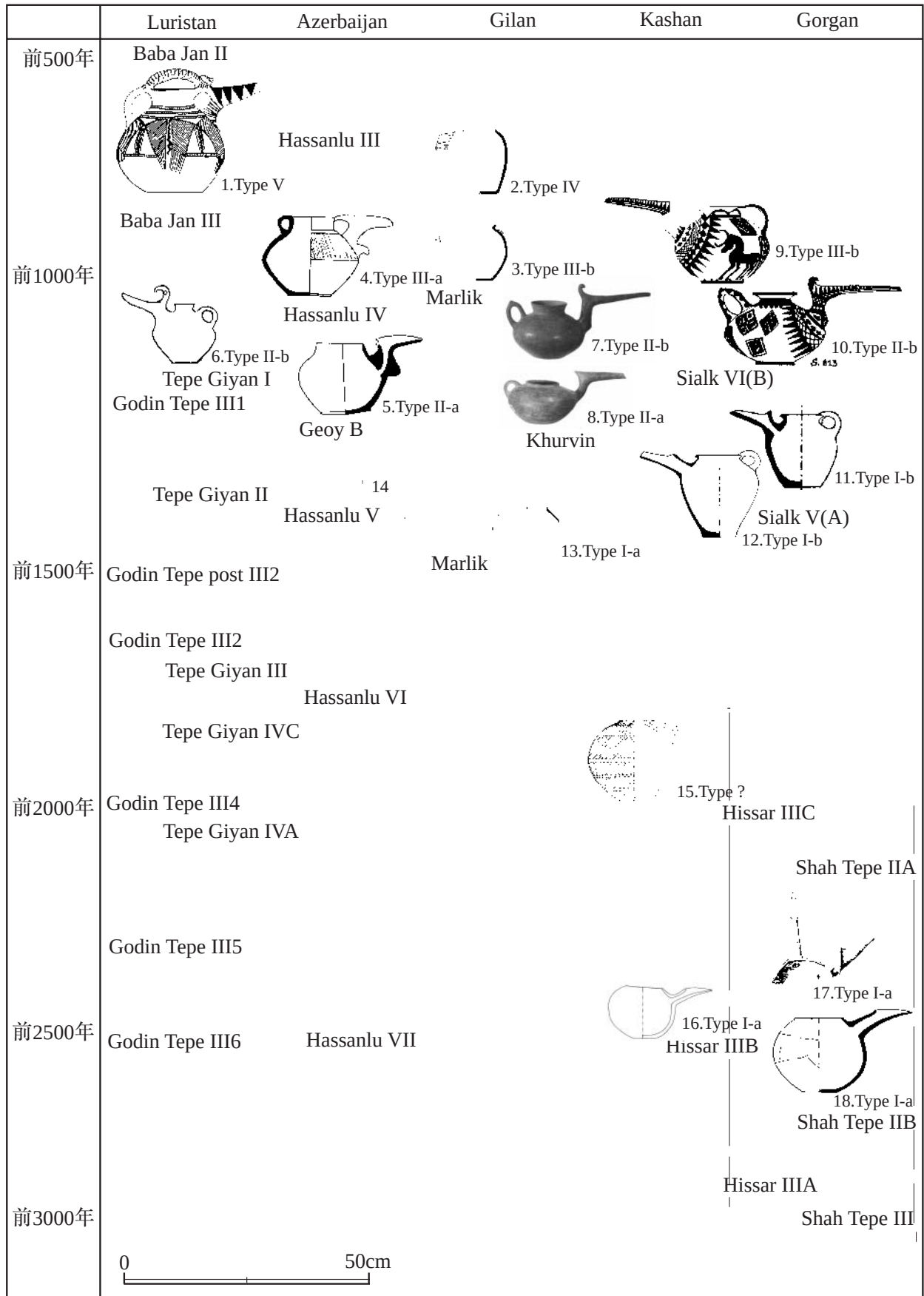


図9 嘴形注口土器編年試案図（出典は文末）

Ⅳ類は筒状の鉢形という特徴的な器形で、注口頸部に数条の沈線文が巡らされるのも特徴である。ジャラリエ遺跡のⅡ層から、Ⅳ類の注口頸部片が出土している(図8-1)(Adachi 2005)。ジャラリエ遺跡Ⅱ層の年代については、ハーリンクの編年(Haerinch 1988)の鉄器時代Ⅲ期(前8～前7世紀)に属する(図3)(Adachi 2005; 足立 2004b)ことから、この資料の存在はⅣ類の時期が鉄器時代Ⅲ期であることを示しており、非常に重要である。

Ⅴ類については、ババ=ジャンⅢ式彩文土器の範疇であるので、前9～前8世紀と年代を与えることが可能である(Adachi 2004)。ババ=ジャン遺跡の報告には、嘴形注口土器はババ=ジャンⅢ式土器の中では稀な器種であることが示唆されている(Goff 1978: 30)。

本稿の分類案と分析結果は以下の7点にまとめられる。

1. 嘴形注口土器は前3千年紀半ばから前1千年紀前半まで連綿と製作され続けた特殊な器形の土器である。
2. 嘴形注口土器は槌状の嘴部と管状の頸部によって形成される嘴形注口を有する土器であり、8類型(Ia, Ib, IIa, IIb, IIIa, IIIb, IV, V類)に分類した。
3. 最古の類型はIa類であり、その発生は前3千年紀半ばに遡る。
4. 注口嘴部と注口頸部が屈曲するIIa類から注口嘴部と口縁部が橋部で連結するⅢ類に変化する。
5. Ⅲ類は鉄器時代Ⅱ期の指標となる。
6. ギーラーン地域に分布するⅣ類は鉄器時代Ⅲ期に属する。
7. ルリスターン地域に分布するⅤ類はババ=ジャンⅢ式彩文土器に属し、その年代は前9～前8世紀である。

Ⅳ. 考察

嘴形注口土器は、Ⅰ～Ⅴ類までの様々な形態に変容していたことを提示した。その期間は前3千年紀半ばから前1千年紀前半のおよそ2000年間にわたっており、長期間使用された器形であることは明らかである。注口土器そのものは一般的な器形と言えるが、嘴形注口土器は、長い注ぎ口を持つ特殊な器形である。このような特殊な器形が、単なる流行として長期間製作され続けたとは考えにくい。何らかの意味、あるいは用途が存在したはずである。本稿では、これを古代イラン多神教のハオマ祭祀に関連するものと推定した。

嘴形注口土器Ia類は青銅器時代に遡る土器であり、彩文が施されず、北東イランのみに分布する。それに対して、Ⅱ類は中央・北西イランでも出土する。ハサンル遺跡において、IIa類は早期西方灰色土器(Early Western Gray Ware)と呼ばれる土器群の一器形として登場し(Young 1965, 1985; 堀 1985: 172; Overlaet 2003: 6-8)、IIb類はし

ばしば彩文が施され、シアルク遺跡Ⅴ期に出現する。このことから嘴形注口土器は北東イランで出現した後、在地の土器伝統を吸収しながら北西イランへと伝播していることがわかる。Ⅲ類は装飾や調整において地域性を持続しながら、注口嘴部と口縁部を連結する橋部という特徴を持ち、鉄器時代Ⅱ期のイランで広く分布している。

しかし、Ⅲ類にみられるような在地の土器文化と汎イラン的な土器文化の融合は鉄器時代Ⅲ期には受け継がれない。Ⅳ類はギーラーン州、Ⅴ類はルリスターン州を中心として分布する在地的な鉄器時代Ⅱ～Ⅲ期の土器である。重要な点は、鉄器時代Ⅲ期に並行するメディアの中心地では嘴形注口土器は存在しておらず、続くアケメネス朝期にも見られないことである。このことは嘴形注口土器を使用する行為、すなわち前3千年紀から連綿と受け継がれてきた行為はメディア、アケメネス朝期では実施されていなかったことを意味する。その行為を祭祀的なものと考え、この祭祀は前3千年紀にまで遡ることになり、原イラン多神教に関連したものである可能性が高いと考えた。

しかしながら、最近調査されたメディアの城塞址と考えられるオズバキー遺跡では、IIb類が出土している(Majzdateh n.d.: Pl. 7-7)。ストロナークは、オズバキー遺跡がヌシ=ジャン、ゴディンなどのハマダン周辺以外で初めて発見されたメディアの遺跡であることに注目している(Stronach 2003: 239-40)。報告に図示された図面を見ると確かにヌシ=ジャン、ゴディン、ババ=ジャンに特徴的な把手付鉢や把手付壺が出土しており(Majzdateh n.d.: Pl. 6, 7)、メディアの城塞遺跡である可能性は高い。だが、出土した嘴形注口土器IIb類はメディアの中核地に存在していた土器ではなく、オズバキー遺跡が位置する北イランで特徴的な土器であり、「メディアの土器」ではない。そのため、この地に進出したメディアの遺跡に在地の土器が混入していたものと考えられる。この現象は前述した土器文化の相互交流の一例と考えられる。オズバキー遺跡はハマダン周辺からかなり離れており、メディアにとって東方の前線基地といった性格を持つと考えられよう。

さて、本稿前半ではアケメネス朝以前の宗教とメディアの地理的位置づけについて検討してきた。宗教の問題については、確実に原ゾロアスター教が存在しないとされる時期から連綿と使用され続けている嘴形注口土器を原イラン多神教のハオマ祭祀に関連する祭祀土器と位置づけた。

メディアの問題では、考古学の成果からその中核地域がハマダン周辺の以西(レヴァイン説)のヌシ=ジャン、ババ=ジャン、ゴディン遺跡に存在したことを示唆し、これらの遺跡のメディア期には嘴形注口土器が存在しないことを確認した。またメディア期と並行する鉄器時代Ⅲ期にお

いて、アッシリアのザグロス侵入に呼応した土器文化の相互交流が見られることを指摘した。

イラン文化遺産観光庁と中近東文化センターのギーラン州（セフィードルード川流域）における発掘および分布調査は、鉄器時代Ⅲ期に遺跡が急激に増加することを明らかにしている（Yamauchi 2005; Ohtsu et al. 2006）。この遺跡増加の時期はメディア期と符号しており、裏返せばアッシリアのザグロス侵入の時期とも一致する。

山内和也はこのセフィードルード川流域における調査研究から、当該期の人々が「垂直方向の移牧」を行っていたことを明らかにした（山内 2006）。山内の「山越え文化伝播モデル」は様々な文化が伝播することだけでなく、集落そのものが山岳地域で増加することを示すモデルでもある。この「垂直方向の移牧」はセフィードルード川流域のエルブルズ山脈内だけでなく、ザグロス山脈でも有効な理論であることが、G. B. ランフランチ（Lanfranchi）やローフ、R. ロリンガー（Rollinger）らの古代イランの研究者によって指摘されている（Lanfranchi et al. 2003a: 400）。今後、この山内のモデルを援用したザグロス山脈地域の鉄器時代集落の様相が解明されることが期待される。山内は鉄器時代に山岳地帯で集落が増加する原因として、元来はウシ中心であった家畜にヒツジ・ヤギが導入された結果であることを指摘している（山内 2006）。

鉄器時代Ⅲ期に北イランで土器文化の相互交流が存在することを指摘したが、このような交流の中でヒツジ・ヤギを利用した生業がセフィードルード川流域に本格的に導入されたのかもしれない。

結論

本稿では、イランの青銅器時代から鉄器時代に存在する嘴形注口土器の機能が、原イラン多神教における男性戦士結社が使用したハオマ祭儀に関連する祭祀土器である、という仮説を提示した。

この仮説を検証するために、アケメネス朝以前の原ゾロアスター教の形成過程をめぐる諸説を整理し、原イラン多神教、マズダー教との関係性について検討した。そして、「ハオマ」に関した祭儀では、特に原イラン多神教と原ゾロアスター教では大きく異なる可能性を指摘した。

嘴形注口土器を持った男性土偶の存在や注ぎ口を強調した構造、イラン鉄器時代に長期間使用され続けていることから、原イラン多神教のハオマ祭儀に嘴形注口土器が使用されていたと推定した。そして、嘴形注口土器の分布からみて、その祭儀はメディア中核地域では施行されなかったと考えた。しかしながら、メディア期に並行する時期（鉄器時代Ⅱ、Ⅲ期）には、メディア以外の地域で、原イラン多神教の祭儀が続いていたと判断した（Ⅱb、Ⅳ、Ⅴ

類）。

メディアにおいて嘴形注口土器の祭祀が施行されなかった原因は、アッシリアのザグロス侵入にその一因があると考えた。軍事的にも経済的にも強力なアッシリア勢力との接触に伴って、イラン鉄器時代の人々は様々な文化的・社会的変容を余儀なくされた。アッシリアとの接触の最前線に立ったメディアの変革とは、既存の宗教とは大きく異なる原ゾロアスター教の採用であったのではないだろうか。

この考えに立てば、原ゾロアスター教の成立段階は、本稿で示した2段階説2類を取ることになる。しかし、メディア期から原ゾロアスター教が誕生したと指摘しているわけではない。現段階では、メディア期から何らかの原ゾロアスター教に関連する新しい祭祀を採用したのだと考えておきたい。その際、以前の嘴形注口土器を使用した祭祀活動は執り行われなくなったのだろう。また本稿の結論として、マズダー教の存在を否定しているわけではない。マズダー教について考古学的に考察できない現時点での仮説として、2段階説2類を提示しておく。

さて、青木健は現代ゾロアスター教の聖火を現地調査し、現代の聖火にイランの民間信仰が習合していることを明らかにしている（2002）。この民間信仰融合型のゾロアスター教はサーサーン朝期に大規模に起こったと青木は推定している（青木 2002 42）。つまりサーサーン朝以前に、ゾロアスター教以外の多様な民間信仰が厳然と存在していたと考えられよう。本稿の原イラン多神教から連なるものも存在するかもしれない。

イラン史を叙述する際には、ゾロアスター教、イスラム教以外の様々な宗教が存在したことを考慮することが肝要であろう。

本稿執筆に際し、山田重郎氏に文献収集、片山祐介・有松唯氏には実測図作成などで多大なご協力を賜った。また春田晴郎氏にはゾロアスター教のハオマについてご教授いただいた。ここに記して感謝の意を表する。本稿は、日本オリエント学会第45回大会と日本西アジア考古学会第11回大会での研究発表を基にして作成した。発表の機会を与えていただいた両会に感謝申し上げる。末筆ながら、査読者並びに編集委員の方々から正鵠を得たご助言を多数いただいたことにも感謝申し上げたい。

図7の出典

1: Arne 1945: Fig. 386; 2: Ghirshman 1939: Tom 13; 3: 中近東文化センター附属博物館所蔵品; 4: Vanden Berghe 1964: Pl. 3-20; 5: Ghirshman 1939: Tom 15-38; 6: Vanden Berghe 1964: Pl. 3-21; 7: Dyson 1968: 84; 8: Ghirshman 1939: Pl. 86; 9: Negahban 1996: Fig. 30-14; 10: Goff 1980: Fig. 18.

図9の出典

1: Goff 1980: Fig. 18; 2: Negahban 1996: Fig. 25-16; 3: Negahban 1996: Fig. 25-20; 4: Dyson 1968: 84; 5: Dyson 1965: Fig. 2; 6: Conteau and Ghirshman 1935: Tom 54; 7: Vanden Berghe 1964: Pl. 3-21; 8: Vanden Berghe 1964: Pl. 3-20; Ghirshman 1939: Pl. 86; 10: Ghirshman

1939: Tom 15-38; 11: Ghirshman 1939: Tom 13; 12: Ghirshman 1939: Tom 5; 13: Negahban 1996: Fig. 25; 14: Dyson 1968: 84; 15: Yale and Schmidt 1982: Abb. 8; 16: Yale and Schmidt 1982: Abb. 7; 17: Arne 1945: Fig. 476; 18: Arne 1945: Fig. 386.

註

- 1) 通常のゾロアスター教の段階とは、「ヴェーダ型の多神教」→「ゾロアスターによる多神教非難」→「祭司たちによって部分的に修正された多神教」という三段階で、サーサーン朝期までのゾロアスター教の変遷を表す概念である（ニヨリ 1996）。本稿の段階とは原ゾロアスター教がいかに成立したかという形成段階であり、アケメネス朝以前を対象としている。
- 2) 青木健は「原始ゾロアスター教」と称している（青木 2006: 4）。
- 3) インド・ヨーロッパの諸民族に認められる神々で、祭司、戦士、牧畜・農耕民の三つの社会階級に対応する。前 2 千年紀以前にインドで記された『リグ・ヴェーダ』では、ヴァルナとミトラ（祭司）、インドラ（戦士）、ナースティア双神（牧畜・農耕民）となる（エリアーデ 2000: 24-5）。
- 4) 一般に使用されている「ゾロアスター」は英語である。アヴェスター語では「ザラスシュトラ」、中・近世ペルシア語では「ザルドシュト」である（青木 2002: 43）。本稿では混乱を避けるため、教祖名は「ザラスシュトラ」、宗教名は「ゾロアスター」教と区別する。
- 5) 「ヤスナ」とは、ゾロアスター教の祭儀で読誦されるもの（岡田 2002: 40）。「敬神書」とも呼ばれ、基本的な祈祷と「ガーサー」を集めた『アヴェスター』の一部（ハーツ 2004: xiii）。
- 6) 「ガーサー」とはザラスシュトラ自身の教説で、「ヤスナ」に収められている。「ヤスナ」の章では、28-34、43-51、53 章の計 17 章にあたる。伊藤義教によって訳されている（伊藤 1972）。
- 7) 「ヤシュト」は神々への賛歌であり、全 21 章からなる。岡田明憲によって、その一部が訳されている（岡田 2002）。
- 8) 「ウィーデーウ・ダート」は除魔書で、呪術儀礼や教徒の戒律を中心に説かれる（岡田 2002: 40）。岡田明憲によって訳されている（岡田 1984）。
- 9) 最近では、原ゾロアスターを前 1000 年以前とする説に J.ケレンがあり（Kellens 2000）、ザラスシュトラの生年を前 618 ～前 541 年におく G.ニヨリ説がそれと対峙するもの（Gnoli 2000: 165）であろう。
- 10) このことが記されているのはニーベリの『イランの古代宗教 (Irans forntida religiöuner)』である（Nyberg 1937）が、筆者はこの文献を熟読するには至らなかった。ここではヴィンカデルによってまとめられた内容（ヴィンカデル 1997: 9）を紹介した。
- 11) 「ウスィグ」と記される場合もあるが、本稿では「ウシグ」で統一した。
- 12) 近年の調査の概要については以下の文献が参考になる。山内 1995, 1996, 1997; 足立 2004
- 13) ケレンはこのような指摘を重視しない立場である（Kellens 2000: 27）。
- 14) 山崎幹夫はハオマ＝キノコ説に対し、このキノコをベニテングダケとする説を紹介している（山崎 1985: 84）。
- 15) アエーシェマは凶暴を司る悪魔で、善神であるミスラやスラオシャと対立関係にある。血に塗られた武器を持つものとして表現される（岡田 1984: 60）。
- 16) 道理、最高の教理（ハーツ 2004: vii）。ヴェーダのリタ（天則）に対応し、正義とも訳される。アフラ・マズダーを筆頭とするスプンタ・マンユ（善神、聖霊）の二柱。

- 17) この訳に対しては反論がある（青木 2002: 233）。
- 18) キャルーラズ遺跡はイラン文化遺産観光庁と中近東文化センターが共同調査したジャラリエ遺跡と同じ遺跡群である。遺丘がジャラリエ遺跡であり、遺丘裾にキャルーラズ遺跡が存在する。
- 19) 実際に実測を行ったのは当時調査に参加していた四角隆二氏（岡山市立オリエント美術館学芸員）である。
- 20) 高田早苗氏寄贈品。
- 21) ベルギー隊のルリスタン地域の調査（Overlaet 2003）、またギーラーン州のマールリク遺跡（Negahban 1996）、まだ不完全であるが北西イランの指標遺跡であるハサンル遺跡（Dyson 1989）、そして中近東文化センターとイラン文化遺産庁によるギーラーン州ロスタマバード周辺の調査（Ohtsu et al. 2002, 2003, 2004, 2005, 2006）などである。
- 22) イランにおける鉄器時代が前 1500 年頃に遡るとする考えは、ハサンル遺跡の年代観が変化（Dyson 1989）したことによるものである。この遺跡の V 層は鉄器時代 I 期とされ、前 1200 ～前 1000 年頃の年代が与えられていたが、新たな放射性炭素年代により前 1450 年～前 1250 年頃と修正された。その結果、北西イランにおける鉄器時代の開始が他地域に比べ早まることになると共に、イラン内の鉄器時代編年に大きなずれが生じるようになった。最近ではシアルク遺跡で設定されているシアルク V 期（A 期）と VI 期（B 期）が同時期ともとれる編年案も示されており、両期とも前 1300 ～ 900 年に年代づけられている（Institut Français de Recherche en Iran 2001: 43）。従来シアルク V、VI 期はそれぞれ前 1200 年～前 1000 年、前 1000/900 年～前 800/700 年頃と考えられていた。一方、ルリスタン地方の研究は新たな進展を見せ、近年ベルギー隊によるこの地方の年代観が示された。そこでは鉄器時代 IA 期（前 1300 年～前 1150 年）、IB-IIA 期（前 1150 年～前 900/800 年）、III 期（前 900/800 年～前 600 年）とされており（Haerinck and Overlaet 2002）、ハサンルの年代や以前のハーリンク（Haerinck 1988）の編年とは明らかな「ずれ」が生じている。
- 23) これらの説はアッシリアのザグロス進出の研究であり、メディアの位置を探るための研究ではない。
- 24) 嘴形注口土器の分析のため、ルリスタン地域として、テペ・ギヤン（Tepe Giyan: Conteau and Ghirshman 1935）、ババ＝ジャン（Baba Jan: Goff 1968, 1978, 1980）、アゼルバイジャン地域として、ハサンル（Hasanlu: Dyson 1965, 1968, 1989）、ギョイ・テペ（Geoy Tepe: Brown 1951）、ギーラーン地域として、マールリク（Marlik: Negahban 1996）、フルヴィン（Khruvin: Vanden Berghe 1964）、カシャー・テヘラン地域として、カイトリイェ（Qaytariyeh: Kambachsh Fard 2001）、シアルク（Sialk: Ghirshman 1938, 1939）、オズバキー（Ozbaki: Majidzadeh n.d.）、ゴルガン地域として、シャー・テペ（Shah Tepe: Arne 1945）、ヒサル（Hissar: Yale and Schmidt 1982）の出土資料を検討した。また中近東文化センター附属博物館収蔵品とキャルーラズ遺跡出土資料を検討に加えた（図 2、8）。シャー・テペ（Shah Tepe）IIB 層（図 8-18）とヒサル（Hisar）III C 層（図 9-16）の類例が確認できる資料では最も古く、前 3 千年紀半ばに年代づけられる。新しい資料は型式学的にババ＝ジャン III 式彩文土器と認定される資料（前 9 ～ 8 世紀頃）（図 6-10）、そしてジャラリエ遺跡 II 層出土土器片（図 2-1）である。

参考・引用文献

Adachi, T. 2003 The Development of the “Ear” Pommel Sword in Northwestern Iran. *Bulletin of the Okayama Orient Museum* vol. 19.

- pp. 25-37.
- Adachi, T. 2004 Tentative Chronological Sequence of Bow-Tie Designs in Baba Jan III Painted Ware. *Orient* vol. 39. pp. 79-95.
- Adachi, T. 2005 The Iron Age Pottery from Tappe Jalaliye Layer II, III. In Ohtsu, T. et al. (eds.), pp. 69-95.
- Arne, T.J. 1945 *Excavations at Shah Tepé, Iran*. Stockholm, Elanders Boktryckeri Aktiebolag Göteborg.
- Boyce, M. 1970 Haoma, Priest of the Sacrifice. In Boyce, M. and I. Gershevitch W. B. *Henning Memorial Volume*. London, Lund Humphries. pp.62-80.
- Brosius, M. 2006 *The Persians: an Introduction*. London and New York, Routledge.
- Brown, T.B. 1951 *Excavations in Azerbaijan, 1948*. London, Jhon Murray Ltd.
- Conteau, G. and Ghirshman, R. 1935 *Fouilles du Tépé-Giyan, près de Néhavend, 1931 et 1932*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Curtis, J. 2003 The Assyrian Heartland in the Period 612-539 BC. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.157-67.
- Delougaz, P. and H.J. Kantor 1996 *Chogha Mish vol.1, the First Five Seasons of Excavations 1961-1971*. Chicago, the Oriental Institute of the University of Chicago.
- Dyson Jr., R.H. 1965 Problems of Protohistoric Iran as Seen from Hasanlu. *Journal of Near Eastern Studies* 24: 193-217.
- Dyson Jr., R.H. 1968 Hasanlu and the Solduz and Ushnu Valleys: Twelve Years of Exploration. *Archaeologia Viva*. I Paris, les Publications d'art et d'archéologie. pp.82-101.
- Dyson Jr., R.H. 1989 Reconsidering Hassanlu. *Expedition* 31: 3-11.
- Fahimi, H. 2000 *The Culture of Iron Age in South West Coasts of the Caspian Sea: from Archaeological View Point*. Tehran, Samira publication. (in Persian).
- Fahimi, H. 2003 Iron Age at Sialk. In Shahmirzadi, S.M. (ed.) *The Siversmiths of Sialk: Sialk Reconsideration, Project Report No.2*. Tehran, Archaeological Research Center, Iranian Cultural Heritage Organization. pp.79-127.
- Ghirshman, R. 1938 *Fouilles de Sialk, près de Kashan, 1933, 1934, 1937. Volume I*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Ghirshman, R. 1939 *Fouilles de Sialk, près de Kashan, 1933, 1934, 1937. Volume II*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Gnoli, G. 2000 *Zoroaster in History*. New York, Bibliotheca Persica Press.
- Goff, C. 1968: Luristan in the First Half of the First Millennium B.C. A Preliminary Report on the First Season's Excavations at Baba Jan, and Associated Surveys in the Eastern Pish-i-Kuh, *Iran* 6,105-134.
- Goff, C. 1978 Excavations at Baba Jan: the Pottery and Metal from Level III and II. *Iran* 16: 29-65.
- Goff, C. 1980 *An Archaeologist in the Making*, London, Constable and Company Ltd.
- Gopnik, H. 2000 *The Ceramics of Godin II: Ceramic Variability in the Archaeological Record*. Unpublished PhD dissertaton. Toronto, University of Toronto.
- Haerincq, E. 1988 The Iron Age in Guilan - Proposal for a Chronology. In Curtis, J. (ed.) *Bronzeworking Centres of Western Asia c.1000 - 539 B.C*. London, Kegan Paul International Limited. pp.63-78.
- Haerincq, E. and Overlaet, B. 2002 The "Luristan Problem" Reconsidered the Belgian Archaeological Expedition in Pusht-i Kuh, Luristan (West Iran). In Kontani, R. et al. (eds). pp.76-89.
- Institut Français de Recherche en Iran 2001 *Les Recherches Archéologiques Françaises en Iran*. Tehran and Paris, Musée National d'Iran and Musée du Louvre.
- Kambachsh Fard, S. 2001 *A Glance at Tehran 3000 Years Ago*. Tehran, Presentation and Education Vice-directorate Education, Publervations and Cultural Productions General Office.
- Kellens, J. 2000 *Essays on Zarathustra and Zoroastrianism*. Costa Mesa, Mazda Publishers.
- Kontani, R., Adachi, T. and Ohtsu, T. (eds) 2002 *Treasure from Ancient Iran: Metalworking Culture in the Mountains*. Okayama, The Okayama Orient Museum. pp.76-89. (紺谷亮一・足立拓朗・大津忠彦 (編) 『古代イラン秘宝展山岳に華開いた金属器文化』岡山市立オリエンツ美術館)
- Kroll, S. 1991 Zu den Beziehungen Eisenzeitlicher Bemalter Keramikkomplexe in Oman und Iran. In Schippmann, K., Herling, K.A. and J.F. Salles (eds.) *Golf Archäologie, Mesopotamien, Iran, Kuwait, Vereinigte Arabische Emirate und Oman*. Inernational Archäologie 6. Erlbach, M.L. Leidorf pp.315-20.
- Lamberg-Karlovsky, C.C. and P. Magee 2004 *Excavations at Tepe Yahya, Iran 1967-1975*. Hollis, New Hampshire, Puritan Press.
- Lanfranchi, G.B., M. Roaf and R. Rollinger (eds.) 2003 *Continuity of Empire (?): Assyria, Media, Persia*. Padova, La Madernissima.
- Lanfranchi, G.B., M. Roaf and R. Rollinger 2003a Afterword. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.397-406.
- Levine, L.D. 1987 The Iron Age. In F. Hole (ed.) *The Archaeology of Western Iran, Settlement and Society from Prehistory to the Islamic Conquest*. Washington D.C. and London, Smithsonian Institution Press. pp 229-250.
- Levine, L.D. 2004 Politics and Geographic Scale in Iron-Age Iran. In Azarnoush, M. (ed.) *Proceedings of the International Symposium on Iranian Archaeology: Northwestern Region*. Tehran, Archaeological Research Center, Iranian Cultural Heritage Organization. pp.55-61.
- Liverani, M. 2003 The Rise and Fall of Media. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.1-12.
- Majidzadeh, Y. n.d. (2002?) *Nakhostin o dovvin fasl hafriyat bastan-shenakhti dar dar mohith Ozbaki: savejblagh (1377-1378)*. Tehran, Iranian Cultural Heritage Organization. (in Persian)
- Magee, P. 1997 The Iranian Iron Age and the Chronology of Settlement in Southeastern Arabia. *Iranica Antiqua* 32: 91-108.
- Medvedskaya, I.N. 1982 *Iran: Iron Age I*. Oxford, BAR International.
- Muscarella, O.W. 1984 Fibulae and Chronology, Marlik and Assur. *Journal of Field Archaeology* 11: 413-419.
- Negahban, E.O. 1996 *Marlik: the Complete Excavation Report*. Philadelphia, the University Museum, University of Pennsylvania.
- Nyberg, H.S. 1937 *Irans forntida religioner*. Stockholm, Svenska Kyrkans Diakonistyrelses Bokforlag.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh and K. Yamauchi 2002 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, First Season*. Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh and K. Yamauchi 2003 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Second Season*. Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh and K. Yamauchi 2004 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Third Season*. Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh and K. Yamauchi 2005 *Preliminary Report of the*

- Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season.* Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh, K. Yamauchi and T. Adachi 2006 *Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fifth Season.* Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T. and T. Adachi 2006 Outline of the Research during the 2005 Fiscal Season. In Ohtsu, T. et al. (eds.) pp.6-29.
- Overlaet, B. 2003 *The Early Iron Age in the Pusht-I Kuh, Luristan.* Acta Iranica 40, Luristan Excavation Documents vol. IV. Leuven, Peeters.
- Potts, D.T. 1990 *The Arabian Gulf in Antiquity vol I: From Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire.* Oxford, Clarendon Press.
- Read, J.E. 1978 Kassites and Assyrians in Iran. *Iran* 16: 137-143.
- Read, J.E. 1995 Iran in the Neo-Assyrian Period. In Liverani, M. (ed.) *Neo-Assyrian Geography.* Rome., pp.33-42.
- Read, J. 2003 Why did the Medes invade Assyria? In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.149-56.
- Roaf, M. 1995 Media and Mesopotamia: History and Architecture. In J. Curtis (ed.), *Later Mesopotamia and Iran: Tribes and Empires 1600-539 BC*, British Museum Press, London. pp. 54-66.
- Roaf, M. 2003 The Median Dark Age. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.13-22.
- Sancisi-Weerdenburg, H. 1988 Was There ever a Median Empire? In A. Kurt and H. Sancisi-Weerdenburg (eds.) *Achaemenid History III: Method and Theory.* Leiden, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten. pp.197-212.
- Sarraf, M.R. 2003 Archaeological Excavations in Tepe Ekbatana (Hamadan) by the Iranian Archaeological Mission between 1983 and 1999. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.269-79.
- Simpson, S.J. 1997 Early Iron Age Rural Ceramic Traditions in Iran. In Freestone, I. and D. Gaimster (eds.) *Pottery in the Making: World Ceramic Traditions.* London, British Museum Press. pp.152-7.
- Stronach, D. and M. Roaf 1978 Excavations at Tepe Nush-i Jan. *Iran* 16: 1-28.
- Stronach, D. 2003 Independent Media: Archaeological Notes from the Homeland. In Lanfranchi, G.B. et al. (eds.) pp.233-48.
- Yale, P. and E.F. Schmidt 1982 *Tepe Hissar: Neolithische und Kupferzeitliche Siedlung in Nordostiran.* München, Verlag C.H. Beck.
- Yamauchi, K. 2005 Formation of Historical and Cultural Landscape of the Kaluraz Valley. In Ohtsu, T. et al. (eds.) pp.109-113.
- Young, T.C. 1965 A Comparative Ceramic Chronology for Western Iran, 1500-550 B.C. *Iran* 3: 53-85.
- Young, T.C. 1985 Early Iron Age Iran Revisited: Preliminary Suggestions for the Re-analysis of Old Constructs. In Hout, J.-L., Yon, M. and Y. Calvet (eds.) *De l'Indus aux Balkans, Recueil à la mémoire de Jean Desbays.* Paris, Editions Recherche sur les civilisations. pp.361-378.
- Young, T.C. 1988 The Early History of the Medes and Persians and the Achaemenid Empire to the Death of Cambyses. In J. Boardman, N.G.L.Hammond, D.M.Lewis and M.Ostwald (eds.), *The Cambridge Ancient History*, Second Edition, vol. IV: Persia, Greece and the Western Mediterranean, c.525 to 479 B.C., Cambridge, Cambridge University Press, pp.1-52.
- Young, T.C. 2003 The Kangavar Survey – the Iron Age. *Iranica Antiqua* 37: 419-436.
- Vanden Berghe, L. 1964 *La Nécropole de Khurvin.* Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut in Het nabije Oosten.
- Vanden Berghe, L. 1968 The Rich Naturalistic Influence: in Iranian Painted Pottery. *Archaeologia Viva* 1. Paris, les Publications d'art et d'archéologie, pp.20-33.
- 青木 健 2003 「伊藤義教著『ゾロアスター教論集』」『オリエント』45巻1号 229-235頁。
- 青木 健 2005 「ゾロアスター教における聖地の概念－神官階級の「移動する聖火」と平信徒の自然崇拝－」『宗教研究』344号 25-47頁。
- 青木 健 2006 『ゾロアスター教の興亡－サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ－』刀水書房。
- 足利 惇 1972 『ペルシア宗教思想』国書刊行会。
- 足立拓朗 2000 「レヴァント鉄器時代の鉢形土器に見るアッシリアの影響について」『オリエント』43巻1号 161-178頁
- 足立拓朗 2002 「ルリスタン出土の青銅剣と鉄芯青銅剣（耳形柄頭長剣）」紺谷亮一・大津忠彦・足立拓朗（編）98-101頁。
- 足立拓朗 2003 「イラン鉄器時代の嘴形注口土器の変容」日本オリエント学会第45回総会・大会：研究発表配付資料。
- 足立拓朗 2004a 「古代イラン青銅製柄孔付斧の編年試案」『西アジア考古学』第5号 25-36頁。
- 足立拓朗 2004b 『イラン、ギーラーン州鉄器時代の土器編年再考』日本オリエント学会第46回大会：研究発表配付資料。
- 足立拓朗 2004c 「イラン考古学最前線」岡田恵美子・北原圭一・鈴木珠里（編）『イランを知るための65章』明石書店 18-186頁。
- 足立拓朗 2006 「鉄器時代Ⅲ期からみたメディアの考古学的解釈」『日本西アジア考古学会 第11回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 63-69頁。
- 有松 唯 2005 「鉄器時代からバルティア時代にかけてのイラン、デーラマン地域の土器編年」『日本西アジア考古学会第10回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 34-38頁。
- 有松 唯 2006 「カスピ海南岸域における鉄器時代文化の変容と展開－土器分析を中心に－」『日本西アジア考古学会 第11回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 56-62頁。
- 伊藤義教 1967 「アヴェスター」「解説 アヴェスター」『ヴェーダアヴェスター』世界古典文学全集第3巻 筑摩書房。
- 伊藤義教 1974 『古代ペルシア』岩波書店。
- 伊藤義教 1979 『ゾロアスター研究』岩波書店。
- 伊藤義教 1996 「ルリスタン出土の一青銅剣銘をめぐって」『オリエント』39巻1号 41-51頁。
- 伊藤義教 2001 「ゾロアスターとハオマ」『ゾロアスター教論集』平河出版 463-477頁。
- S.ヴィカンデル 1997 『アーリヤの男性社会』（前田耕作監修、檜枝陽一郎・中村忠男・与那覇豊計）言叢社。
- 江上波夫（編）1965 『デーラマンⅠ－ガレクティ・ラスルカンの発掘－』東京大学東洋文化研究所。
- 江上波夫・深井晋司・増田精一（編）1966 『デーラマンⅡ－ノールズマハレ・ホルムルードの発掘－』東京大学東洋文化研究所。
- M.エリアーデ 2000 「ザラスシュトラとイラン宗教」『世界宗教史』2（松村一男訳）筑摩書房 191-235頁。（Eliade, M. 1976 *Histoire des croyances et des idées religieuses: Tom I.* Paris, Payot.）
- 大津忠彦 2003 「2002年度イラン遺跡調査－「日本・イラン共同調査団」によるセフィード・ルード川流域（ギーラーン州）における考古学調査－」『平成14年度 今よみがえる古代オリエント 第10回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 51-56頁
- 大津忠彦・山内和也 1995 「イラン考古学の最近の動向」『オリエント』38巻1号 199-211頁。
- 大津忠彦・山内和也・千代延恵正・岡野智彦 1998 『ギーラーン

- 緑なすもう一つのイラン』(財)中近東文化センター
 大阪市立東洋陶磁美術館(編)2002『高田早苗氏蒐集 ペルシアの陶器』財団法人大阪市美術振興協会。
- 岡田明憲 1984『ゾロアスター教の悪魔払い』平河出版社。
- 岡田明憲 2002(二版)(初版1982)『ゾロアスター教－神々への賛歌－』平河出版社。
- 岡田明憲 1999『拝火教とその教え』『季刊文化遺産』8号 53-55頁。
- 岡田明憲 2004『アフラ・マズダー』『ゾロアスター』『ゾロアスター教』日本オリエント学会(編)『古代オリエント事典』岩波書店 312、576、576-7頁。
- 小川英雄・山本由美子 1997『オリエント世界の発展』世界の歴史4 中央公論社。
- 香月法子 2004『ゾロアスター教－創始者のわかる最古の宗教－』『別冊環「オリエント」とは何か』8号 154-161頁。
- R.ギルシュマン 1966『古代イランの美術』(新規矩男監修、岡谷公二訳)新潮社。
- R.ギルシュマン 1970『イランの古代文化』(岡崎敬・糸賀昌昭・岡崎正孝訳)平凡社。
- 紺谷亮一・大津忠彦・足立拓朗(編)2002『古代イラン秘宝展』岡山市立オリエント美術館。
- 佐藤 進 1994『メディア国家形成に関する史料の分析』『立正大学大学院紀要』10号、83-105頁。
- 佐藤 進 1995『メディアおよびペルシアにおける民族と国家の形成』『オリエント』38巻2号 16-37頁。
- 四角隆二 2003『鉄器時代ケルノス・リングの起源と展開』『西アジア考古学』4号、77-85頁。
- シルクロード研究所・山内和也(編)2002『平山コレクションⅢシルクロードの土と形』シルクロード研究所。
- 曾野寿彦・深井晋司(編)1968『デーラマンⅢ－ハッサニ・マハレ、ガレクティの発掘－』東京大学東洋文化研究所。
- 千代延恵正 2000『ゲイラマン再考』大津忠彦・岡野智彦(編)『ゲイラマン踏査－1997、1998年度イラン遺跡踏査の記録－』中近東文化センター 32-40頁。
- G.ニョリ 1996『ゾロアスターからマニへ』エミール＝パンヴェスト・ゲラルド＝ニョリ『ゾロアスター教論考』東洋文庫609(前田耕作監訳)平凡社(Gnoli, G. 1985 *De Zoroastre à Mani*. Paris, Leçons au Collège de France.)。
- P.R.ハーツ 2004『ゾロアスター教』シリーズ世界の宗教(奥西俊介訳)青土社。(Harts, P.R. 2003 *Zoroastrianism*.)
- 春田晴郎 1998『イラン系王朝の時代』『岩波講座世界歴史2オリエント世界』岩波書店 61-93頁。
- E.バンヴェスト 1996『主要なギリシア語文献に見るペルシア人の宗教』エミール＝パンヴェスト・ゲラルド＝ニョリ『ゾロアスター教論考』東洋文庫609(前田耕作監訳)平凡社(Benveniste, E. 1929 *The Persian Religion according to the Chief Greek Texts*. Paris, Leçons au Collège de France.)。
- 檜枝陽一郎 1997『訳者あとがき』スティグ＝ヴィカンデル(著)、260-2頁。
- W.フォーヘルサング 2005『アフガニスタンの歴史と文化』(前田耕作・山内和也監訳)明石書店。(Vogelsang, W. 2002 *The Afghans*. Oxford, Blackwell Publishers LTD.)
- 深井晋司・池田次郎(編)1971『デーラマンⅣ－ガレクティ第Ⅱ号丘、第Ⅰ号丘遺跡の発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 深井晋司・松谷敏雄(編)1982『ハリメジャンⅡ－ラメ・ザミーンの発掘－』東京大学東洋文化研究所。
- P.ブリアン 1996『ペルシア帝国』『知の再発見』双書57(小川英雄監修、柴田都志子訳)創元社。(P. Briant 1992 *Darius: les perses et l'empire*. Paris, Gaillimard.)
- M.ボイス 1983『ゾロアスター教－3500年の歴史－』(山本由美子訳)筑摩書房。
- 堀 眺 1985『イランの土器』『世界陶磁全集20世界(1)』小学館 149-173頁
- 堀 眺 2000『イラン(2)初期鉄器時代の美術』『世界美術大全集東洋編16西アジア』小学館 229-236頁。
- 前田耕作 1997『ヴィカンデルと同時代の精神たち』スティグ＝ヴィカンデル 241-59頁。
- 前田耕作 2003『宗祖ゾロアスター』ちくま学芸文庫 筑摩書房(初版1997)。
- 三宅俊成 1976『デーラマン古墓出土の土器の考察』『江上波夫教授古稀記念論文集 考古・美術編』山川出版社 297-334頁。
- 山内和也 1996『イラン考古学の新発見(1)』『古代オリエント博物館紀要』17巻 123-49頁。
- 山内和也 1996『イラン考古学の新発見(2)』『古代オリエント博物館紀要』18巻 233-57頁。
- 山内和也 1999『正倉院ガラスの故郷－ゲイラマン州デイルママン地方－』『ガラス工芸－歴史と現在－』岡山市立オリエント美術館 106-109頁。
- 山内和也 2000『セフィードルード川兩岸の古墓群について－垂直方向の移牧からのアプローチ－』大津忠彦・岡野智彦(編)『ゲイラマン踏査－1997、1998年度イラン遺跡踏査の記録－』中近東文化センター 41-51頁。
- 山内和也 2004『正倉院のガラスを求めて－ゲイラマン地方の考古学－』岡田恵美子・北原圭一・鈴木珠里(編)『イランを知るための65章』明石書店 187-191頁。
- 山内和也 2006『イラン・キャルーラズ峡谷の文化的景観の出現と変遷』『叢書「文化財保護制度の研究」文化的景観の成立、その変遷』[第18回国際文化財保存修復研究会報告書]独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター 11-35頁。
- 山崎幹夫 1985『毒の話』中公新書781 中央公論新社。
- 山田重郎 2002『アッシリアとザグロス諸国』紺谷・大津・足立(編)68-73頁。
- 山本由美子 1998『マニ教とゾロアスター教』世界史リブレット4 山川出版社。

足立 拓朗

中近東文化センター附属博物館

Takuro ADACHI

The Museum of the Middle Eastern Culture Center